最北の七千メートル峰

ハンテングリ峰・ポベータ峰遠征　1998

広島県山岳連盟天山登山隊1998

目　　次

１．　ご挨拶　３

２．　計画と準備　４
　遠征の計画から隊の成立
　遠征までの計画及びトレーニング　５

３．　隊員紹介　６

４．　テンシャン山脈概念図・ルート図　８

５．　登山記録（行動記録）　１０
　日誌

６．　登頂記（ﾊﾝﾃﾝｸﾞﾘ）　２２

７．　生還記（ﾎﾟﾍﾞｰﾀ）　２５
　ボベーダ峰（７４３９ｍ）での遭難及び
　レスキューの概要

８．　担当報告
　Ⅰ装備　３０
　Ⅱ医療　３１
　Ⅲ気象　３４
　Ⅳ食料　３９

９．　こぼれ話（雑感）　４１

１０．総括　４８

１１．後援・援助・支援　５０

１２．あとがき　５１

１． ご挨拶

本計画は、広島県山岳連盟加盟団体会員の合同により中央アジア、カザフスタン共和国の７０００m峰に登山し、その行為を通じて国際交流と、高所登山のノウハウを学ぶことを目的として企画されました。

私たちの目指したハンテングリ峰（７０１０m）ボベーダ峰（７４３９m）は天山山脈の中央部、カザフスタン共和国の東に位置し、「地上最北の７０００m 峰」として知られています。

広島県山岳連盟では高所登山を目指す加盟団体員に本計画を提示し、合同で登頂を目指しました。各加盟団体の中堅クラス以上のメンバーが結集し海外高所登山のノウハウを習得すべく、研修を重ねてきました。冬の大山北壁での登攀トレーニングや富士山での高所順応トレーニングを通じてメンバーは着実に経験を積み技術を磨き１９９８年７月 10 日中央アジアに向けて出発しました。この海外登山が実現できましたのも皆様のおかげと隊員一同感謝いたしております。物心両面にわたるご支援本当にありがとうございました。

８月１日、隊員９名中、６名がハンテングリ峰頂上に立ち、当初の目標を達成することができました。我々の実力ぎりぎりいっぱいの挑戦であったと思っております。続いて向かったボベーダ峰では、８月１４日、例年にない深雪の為 7250m まで到達しましたが日没となり、頂上直下の 7200mで予定になかったビバークを隊長判断で決行しました。結果的に悪天候につかまりました。最終キャンプにたどりつくのに３日かかり手足に凍傷を負い 5200mからヘリコプターで救出されることになりました。予備日を使い果たし計画ぎりぎりの８月２２日に帰国することができました。

無事に生還できましたものの、辻隊員は帰国後すぐに入院し治療しましたが手足の指切断という最悪の結果となり、職場復帰にも相当の時間を費やしました。隊員に心身ともに大きな痛手を与えてしまいました。隊長として責任を痛感しております。

ご支援いただきました皆様に本当に心配をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

大きな代償ではありましたが隊員の一人一人にとりましては大変充実した４４日間であったと思います。「地上最北の７０００m峰」はいかに整備されようと大変厳しく、ひとたび荒れれば手のつけようがなく高所登山の厳しさと怖さを身をもって体験することができました。よき仲間とめぐり会え厳しくも貴重な体験を共有できたことを誇りに思います。今回の経験を十分に総括し今後の活動にいかしていく所存です。

ご支援いただいた多くの皆様、本当にありがとうございました。

また、報告書の完成が大変遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

２．計画と準備

遠征の計画から隊の成立

1996年広島国体が終わり、広島県山岳連盟の人的ネットワークがより一層深まった。その後、ポスト広島国体として国際部ではこのネットワークを利用して各レベルに応じた海外登山を企画運営しようという機運がたかまった。

国際部は各加盟団体に対し海外登山についてのアンケートを実施した。各加盟団体員も強い関心をしめしたが、個々の会単独ではなかなか実行に移せない現状が見受けられた。1997年5月岳連国際部が企画してネパールにトレッキングが 2 隊、6千m峰へのライトエキスペジションが1隊実現した。

その中でトレッキングでは物足りない、6千m～7千mの登山を実践したい層があることがわかった。

国際部員でもあり7千m峰にこだわりをもつ高体連の松島、林を中心に計画を進めることになった。隊員は岳連の中から広く公募することとし、時期は98年夏を目標にスタートした。目標とする山域は7月8月の約40日間で登れる7000m峰という条件で探した結果、中央アジア天山山脈のハンテングリ峰（7010m）が最適という結果となった。ここは現在カザフスタン共和国で旧ソ連国際キャンプを引き継いだ民間のハンテングリ社がベースキャンプを経営しアルマトイからの入山そして登山活動の全てをマネージメントしてくれる。経営者はカズベク・バリエフで旧ソ連の最強の登山家、エベレスト・ダウラギリ・カンチェンジュンガ等のサミッターである。

高所登山の経験は松島が6100mまであるだけでほとんどの隊員が初体験となる。高所登山入門的要素の強い我々には最適の設定である。また、96年2月に日山協海外登山研究会に参加したカズベクとユーリ・モイセーエフが広島を訪れ交流もしている。

岳連加盟団体員に公募したのは①ハンテングリ峰（30 日）②ハンテングリ峰とボベーダ峰（44 日）③トレッキング（2週間）である。10月初旬各加盟団体に要項を配布した。岳連行事のたびに宣伝し興味を示す人には資料を配布した。

その結果、7000m峰登頂には高体連登山部より江崎幸雄・辻秀樹、山岳会広島パイオニアより堀内輝明、修道大学山岳会より佐藤建・夫人の佐藤隆子、三原山の会より田中勝彦、日本山岳会広島支部より坂本薫ほか数名から参加の意向が伝えられた。トレッキング参加希望者も数名から声があがる。また、6月の海外登山研究会（福岡）に参加した兼森国際部長に対し大阪山の会の中村広氏が参加を希望しているという連絡が入った。そして98年12月5日第一回のミーテイングが開かれ広島県山岳連盟天山登山隊1998が発足した。以後、技術の向上とメンバーシップ育成を目的とした合宿を大山と富士山を中心として実施した。

隊員の参加を支援するために広島県教育委員会、広島市教育委員会、中国新聞社の後援をいただいた。また登山用具店数社より遠征の装備購入特別割引の特典もいただいた。ほとんど毎週のように都合のつくものはトレーニングを実施した。その結果、最初はただの寄せ集め集団であったが山行を重ねるたびにひとつの大きな目標に向かって、着実に仲間意識が芽生え、隊としてのまとまりができてきた。

最終的に、隊長松島、副隊長堀内、登攀隊長佐藤建、渉外中村、会計記録田中、医療佐藤隆子、気象江崎、装備辻、食料坂本の役割分担で9名からなる広島県山岳連盟天山登山隊1998が誕生した。ハンテングリ社との交渉は大阪の中村氏がパソコン通信を利用していってに引き受けていただいた。また料金のディスカウント、資料収集に活躍していただき強力な助っ人として大変ありがたい存在であった。ほんとうに助かり感謝している。

また㈱佐竹製作所より乾燥米飯のマジックライス、中国新聞社よりカラーフイルム、NHK広島放送局よ

りビデオ映写機の提供を受ける。

遠征までの計画及びトレーニング

97. 12／5

ミーテイング

2／10

ミーテイング

12／26～28

富士山　頂上往復

98. 1／2～4

八ヶ岳　峰の松目沢　大同心ルンゼ

1／10～11

大山

1／17～18

大山

1／24～25

大山

1／31～2／1

大山

2／7～8

大山

2／21～22

大山　別山バットレス

2／28～3／1

大山　弥山尾根

3／7～8

大山　別山バットレス　縦走

3／18

ミーテイング

３／２０～２２

富士山　雪上訓練

3／28～30

八ヶ岳　大同心稜　阿弥陀岳北稜　ジョウゴ沢

４／１

ミーテイング

4／5

天応　ｸﾗｲﾐﾝｸﾞ

4／10～12

富士山　頂上往復

4／22

ミーテイング

4／25～26

芸北　12時間耐久登山

5／3～5

富士山　頂上泊

5／22～24

富士山　頂上泊

6／12～15

富士山　頂上泊

6／23

ミーテイング

6／26～28

富士山　頂上泊

7／5

最終パッキング

7／10

日本出発

３．隊員紹介

隊長　松島　宏

　サドマゾの世界に生き甲斐を感じる男。一見穏和だが、実は「イケイケ」の中年。荷物をいくらでも担ぐすごいパワーを秘めている。

副隊長　堀内　輝章　装備担当

　テントの中で音がすると、この人が必ずおしりを浮かしているのである。「行け行け」に対して「いや待てよ」とブレーキをかける。（どっちが隊長じゃ？）

登攀隊長　佐藤　建　医療担当

　VO2MAXは70というトップランナーの値を持っているが、高所ではからっきしダメ。「うーん。高所は、平地の体力とは全く別もんだ。」

隊員　田中勝彦　　会計担当

　豊富な登山経験を持つ。世界の山々に足跡を残す。三原山の会会長を務める。

隊員　江崎　　幸雄　気象担当

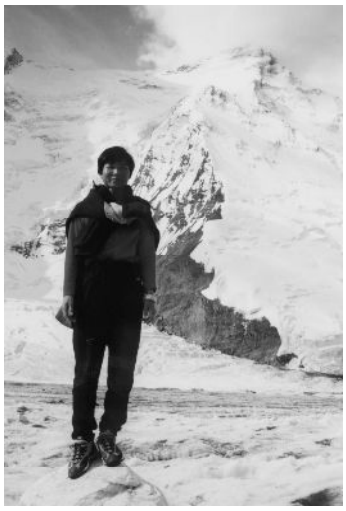
　気象予報士という肩書きを持ち、今回、ﾃﾝｼｬﾝの天気を科学的に予報する。寒暖計と、カシオフィールドセンサーの値を元に見事、天気を的中させる。

隊員　辻　秀樹　装備担当

　このいかにも力持ちの山男という風貌が、素敵である。風貌だけでなく中身も正真正銘の山男である。

隊員　坂本　薫　食料担当

　メンバー全員の好みを考え、バラエチィーにとんだ食糧計画を立てる。休養日に食べた日本食の味が忘れられない。特に若い子においしい料理を振る舞って、我々はあまり口にすることはなかった。（これはひがみじゃ）



隊員　佐藤　隆子　記録担当

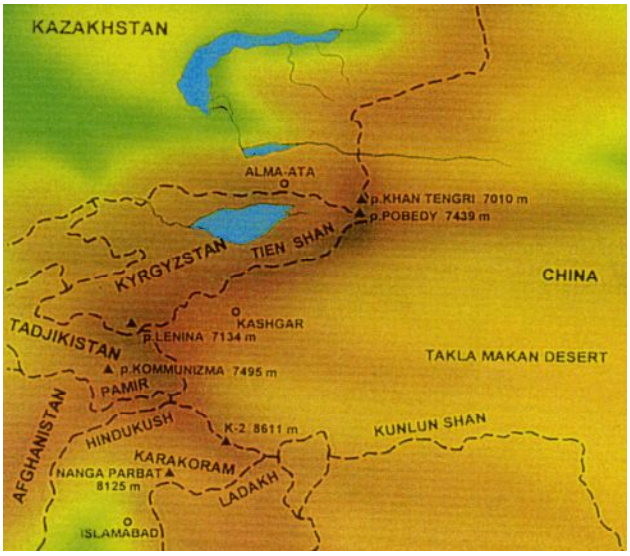
　サトケンの相棒。理責めで相棒を打ちのめす。口は立つが実行が伴わない。経験は少ないが、身軽にユマーリングをこなす。

隊員　中村　宏　渉外担当

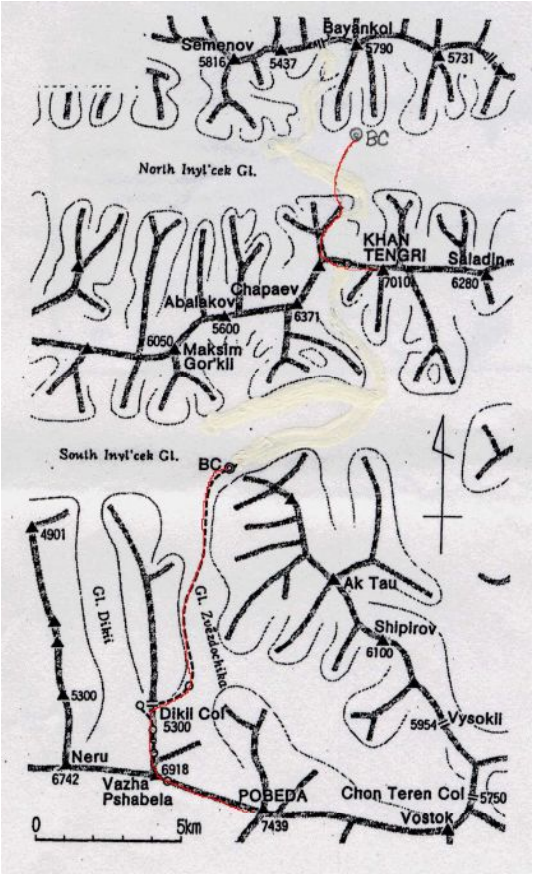
　大阪山の会所属

いつもタバコをくわえている。C3でもテントの口を開き、煙をハンテングリ頂上へ向けふかしていた。豊富な高山経験を生かし、我が隊をサポートしてくれる。

4. テンシャン山脈概念図

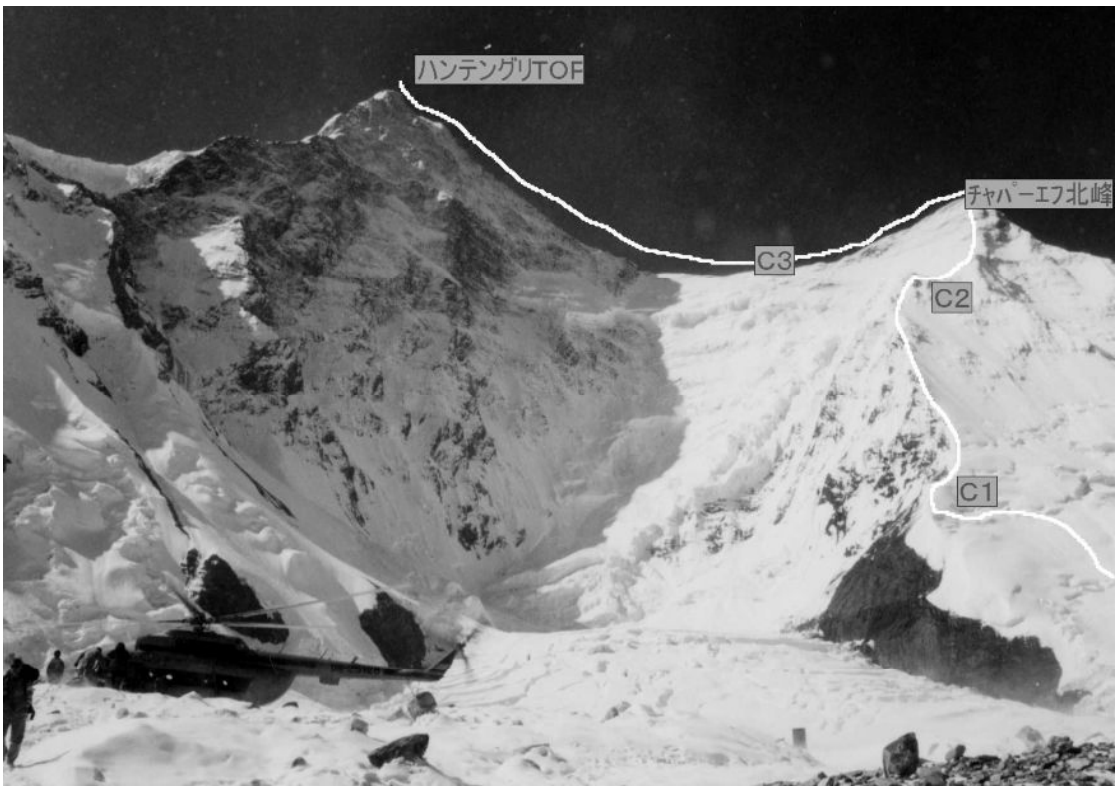


ルートの概念図



※参考近藤和美氏ルート図

ハンテングリ登頂ルート



ポベータルート

タクティクス （計画と実際）

ハンテングリ峰の登頂には2週間と予定していたが実際には3週間かかった。我々の立てた計画ではC1往復、C2泊のチャパーエフ北峰往復、そして頂上往復の3回の波を考えていた。しかし、C2が以外と遠くC1泊のC2往復を間にいれたため1週間余計にかかった。しかし我々の力量からすれば妥当であった。もう少し時間をかけて4週間とすれば登頂者が増えていたかもしれない。C3（5800m）から16時間行動の頂上往復は少々きつかった。しかし、C4（6400m）を設置すれば良かったのかもしれないがその高度で寝れば高度障害を悪化させる隊員がでたかもしれないし一概に判断できない。高度順応は個人差があり本人の申告からしか分らない。行動に支障をきたすような症状も突然おこるので危険である。やはり隊長が十分隊員の順応度を観察して無理させないことである。

ボベーダ峰に向かった2名は7000mまでの順応は完璧であり、予定どおり高度をあげても何ら支障はなかった。C5（6900m）での睡眠で高度障害がでておればあれほど安易にビバークしていなっかただろう。それほど快調な順応であり、7200mのビバーク時も寒かったが高度障害による消耗の自覚は4名ともなかった。もちろん高所衰退の高度ではあるが頂上を目前にして気分が高揚し自覚できなかったのだろう。

44日間で7000m峰を2座登頂することは今回のようなBCの設定であれば天気さえ良くて雪の状態がよければ可能である。もちろんもう1週間余裕があれば良かったと思う。

5. 登山記録（行動記録）

・日誌 （江崎 記録）

７月１０日（金）

定刻に広島空港離陸，ソウルにて乗り継ぎ

定刻より少し遅れて離陸，アルマティまで６ｈ１０ｍの飛行

現地時間１１：４７（１：４７ＪＰ）到着

ホテル（ＯＴＰＡＰ）２：２０（４：２０ＪＰ）着

現地は夏時間で日本時間と２時間の遅れ

７月１１日（土）

仮眠

起床　７：２０　朝食

バスにてカルカラ経へ

カルカラキャンプ着　１６：００

標高　２２０５ｍ　気温１９．１℃

７月１２日（日）

各自それぞれに散策

江崎・坂本・佐藤夫妻・辻　近くの２９０５ｍ峰へ

ヨーロッパアルプス山麓の雰囲気

７月１３日（月）

雨

予定のバスカルカラ峰登山中止

不安定な天気で終日雨と晴が３０分おきくらいに入れ替わる

７月１４火（火）

晴

ヘリフライト約５０分（約１００Ｋｍ）で北ＢＣ着

北イヌリチェク氷河上のキャンプ地

２０張りほどのテントと食堂などの大型テント

現地スタッフとの打ち合わせ（チーフ：ユーリー４４才他）

無線定時連絡など（無線機はヤエスのアマチュア無線２ｍハンディー機）

７月１５日（水）

快晴

高度順化のため全１日休養

各自で氷河上の探索などの行動

夕刻　対岸のハンテングリ北面に雪崩頻発

７月１６日（木）

Ｃ１（４５９０ｍ）までの高度順化登高

ＢＣ発（９：２６）

クレバス，小川を迂回して幅約１．５Ｋｍの氷河対岸まで約４０分

ここよりアイゼンを装着して不安定な急斜面の登高

我ら登山隊は進む

Ｃ１着（１３：４０）

さすがにしんどいが全員体調良好

ＢＣ帰着（１６：３０）

Ｃ１へ向かう

７月１７日（金）

昨夜の雪で一面真っ白

昨夜は３回テントの雪降ろし

今日は一日休養

午後晴　雪面からの日差しが暑い

７月１８日（土）

快晴

チャパーエフ山頂雪煙

Ｃ１への荷揚げとＣ２までの高度順化登高

ＢＣ発（１０：４０）

雪化粧で氷河が氷河が美しい

Ｃ１着（１４：３０）

全員体調良好

Ｃ１泊

７月１９日（日）

薄曇り

Ｃ１発（８：２０）

Ｃ１の約１００m上のコブにG隊テント

途中より小雪

Ｃ２（５５３５m）着（１４：５０）

坂本昨夜から風邪気味で不調の為途中から引き返す（中村随伴）

Ｃ１帰着（２０：００）

江崎・佐藤夫妻ともに食事進まず　坂本不調

７月２０日（月）

薄曇り

下山開始（１０：２０）

ＢＣ帰着（１２：４０）

７月２１日（火）

曇り後小雪

休養日

昼頃，お好み焼きがでてくる　食料係の気遣いうれしい

坂本風邪回復せず明日も休養日と決定

快晴　星空が美しい（２３：０９）

７月２２日（水）

薄曇り　昨夜３～４ｃmの積雪

休養日２日目

小雪が降るかと思うと薄日の差す不安定な天気

夜半過ぎるも食堂テント賑やか

７月２３日（木）

小雪

Ｃ２への荷揚げとチャパエフ北峰（６１２０m）までの高度順化登高

ＢＣ発（１０：３０）

Ｃ１着（１３：５５）

Ｃ１泊

７月２４日（金）

晴

Ｃ１出発（８：００）
Ｃ２着（１７：３０）
Ｃ２泊
ゴアライト（３人）とダンロップ（６人）はきつい
寝袋は心地よさを越えて暑いくらいである

７月２５日（土）

快晴
Ｃ２発（８：１０）
チャパエフ北峰着（１４：３０）
田中は山頂１ピッチ手前で中断，坂本（中村随伴）途中で引き返す
晴風弱のベストコンディションであったが，体力的にハードだったようで脱落者が出た
Ｃ２帰着（１６：５０）
江崎・佐藤夫妻・坂本　オーバーワーク気味で食欲なしハンテングリ登頂に不安を感じる

７月２６日（日）

快晴
下山開始（８：３０）
この二三日の上天気で氷河上の雪も融けた様子
Ｃ１から取り付きまでの下部斜面は雪面下の

チャパーエフ北峰６１５０㍍

Ｃ２よりハンテングリを望む

氷結面がむき出しになっている
ＢＣ着（１３：００）
松平隊，Ｇ隊は明日と明後日にアタック予定

Ｃ２からＣ１へ下降

７月２７日（月）

しんしんと降る雪，テント内で雪音がしない
積雪１０ｃｍ（９：５０）
雪が突然止み陽が照り始める，気温は４℃から２０℃に一挙に上昇
一転してポカポカ陽気
夕映えのハンテングリが美しい

７月２８日（火）

薄曇りのち晴
弱い地震あり（１１：５０）ハンテングリ北面の２箇所から雪崩
アタック隊決定に関するミーティング
坂本・田中・佐藤夫人がアタック隊から降り，松島・中村・堀内・辻・佐藤・江崎の６名と決定

７月２９日（水）

快晴
今日からいよいよアタック行動
堀内・江崎・佐藤・辻はＣ１泊でＣ２へ上がり，松島・中村は翌日（７／３０）ＢＣより直接Ｃ２へ入る予定
ＢＣ発（１２：３３）
Ｃ１着（１５：０８）泊

７月３０日（木）

晴
Ｃ１発（９：２２）
Ｃ２着（１５：００）
松島隊　１５：１５着（ＢＣ発９：２０）
ハンテングリタ焼け

７月３１日（金）

快晴
Ｃ２発（８：３０）
チャパエフ北峰（１３：２０）
Ｃ３（５７７０ｍ）着（１５：３０）
日差しは強いが風は寒い
南正面にポベーダ峰

いよいよ明日アタックだ

８月１日（土）

ガス・小雪
いよいよハンテングリアタック

Ｃ３発（６：２０）
山頂（１６：２０）
雲中の登はんであったが，頂上は晴でポベーダ峰のみが雲海上に浮かぶ最高の眺めであった

クーロワールを登る

ハンテングリ頂上で旗を広げる

下山開始（１７：００）
佐藤不調のため行動が大幅に遅れる
佐藤の前後を松島・中村が固めて下山
Ｃ３着（２２：２２）
２１：３０以降はヘッドランプ点灯
皆疲れがひどく，夕食が取れず
下山時にすれ違った単独登はんのロシア人登山者今だ帰着せずロシアテント付近があわただしい

８月２日（日）

快晴
１日休養
南ＢＣ方面は雲の下，北ＢＣはここからは見えない
今日はスイス隊とブルガリア隊がアタックしている
１７：００　ブルガリア隊帰着，定時交信によるとスイス隊も１５：００登頂
２１：３３　スイス隊帰着

８月３日（月）

快晴
Ｃ３発（８：４０）
昨夜は強風で雪煙状態ゆえかトレースは完全に消去
チャパへの登り返し途中にて，ヘリ要請したスイス隊の救助状況を上から観察
Ｃ３付近の強風ゆえか着地が難しい様子
３度トライして何とか収容
チャパ山頂（１１：２５）　最高の展望　快晴
Ｃ２着（１３：３０）
ＢＣ着（１８：３０）

８月４日（火）

曇り

今日は１日中ハンテングリ見えず

昼食に，登頂祝いの日本食パーティー（テント前にて）

赤白ワインとビール

ユーリー他ＢＣスタッフも招待

西瓜も出てくる

登頂を祝してＢＣスタッフと日本食パーテイ

８月５日（水）

晴

昨日に続き今日もテント前にて和食昼食

持参の和食料理づくし　なんと茶碗蒸し焼きなすびまで出てくる

夕食時ドイツ人パーティーよりメンバーの誕生日とかで，直径５０ｃｍ高さ１５ｃｍのケーキのおすそ分けにあづかる

ポベーダアタックについてのミーティング

松島・辻・中村でアタックと決定

８月６日（木）

うす曇り

ヘリにて南ベースへ移動

松平・山口・富永の３氏の出迎えをうける

南ＢＣは北と異なり，氷河左岸のモレーン上にキャンプがあり，テントは氷上でなく岩片上に設営されている

北ＢＣとは味付けが異なり，昼食が非常に美味しい

夕食は，ＢＣチーフのダニエル氏による本日が８／６であることに触れた平和スピーチと，世界平和を祈念したコニャックによる乾杯でスタート

チーフの心遣いが嬉しい

奇しくもここ南ＢＣのゲストは，数人のドイツ人と，先発の３氏に我々９人の日本人のみ　いずれもソ連と戦火を交えた両国である

軍人上がり風のチーフの対応がどことなくマッチして感動

南ＢＣ　ハンテングリ峰が美しい

８月７日（金）

曇り一時霧雨

堀内・江崎・佐藤でＣ１までの偵察（ルートに赤旗の設置）

Ｃ１に達していないが，標高４２９５ｍ地点４．５Ｋｍで行動を打ち切り（１６：００）

クレバスが縦横に走り迂回を余儀なくされ進めない

ＢＣ着（１８：００）

８月８日（土）

晴

ポベーダアタック隊（松島・中村・辻）と富永氏出発

留守隊長は堀内

アタック隊Ｃ１泊

雲の多い１日であった

夜半前から小雨のち霙

８月９日（日）

小雨

留守隊（佐藤夫妻・江崎・坂本）南イヌリチェク氷河をハンテングリ取り付き付近（４３８５ｍ）まで遡上

改めて氷河の大きさに驚く

アタック隊Ｃ２入り

夜になって雨

８月１０日（月）

雪

南ＢＣに来て初めての雪

アタック隊１５ｃｍの新雪で今日は停滞

午後からは雨
Ｇパーティーとガイド６人が雨の中下山してくる
雪と雪崩で大変だったとのこと
ガイド隊が戻ってしまい，今後は松平隊と本アタック隊は独力でのラッセルを強いられることになった

南ＢＣより望むポベータ峰

８月１１日（火）

晴
久々に暖かくなる
留守隊（江崎・佐藤夫妻・田中）氷河対岸のキルギスタンＢＣまで偵察にでるが天候悪化で引き返す
アタック隊より中村が離脱してＢＣへ戻る
アタック隊は，Ｙ隊（ヤングクライマーズクラブ：松平・富永両氏）と本隊（松島・辻）の合同隊に再編成
第２ロックバンド下まで１ｍのラッセルで直登，Ｃ３（６０００ｍ）を設営
今日は快調に進んだ様子
午後（１６：００）雪
夜半前までには晴れる
ポベーダの中国側に雷光

８月１２日（水）

快晴
南ＢＣに来て以来初めての快晴で，ハンテングリ

が初めて全容を見せる
１５：００　ヘリ到着
後発のトレッキング隊を出迎える
同時にＧパーティー３人の見送る
ポベーダに雲なし
トレッキング隊が日本の家族からの手紙を届けてくれる
笑顔がこぼれる
アタック隊帰還時，中村・堀内・江崎がサポートにＣ１まで入ることにし，田中・佐藤夫妻・坂本はトレッキング隊岡谷班に合流を決定
アタック隊Ｃ４設営
夕映えのハンテングリそして満面の星空が美しい

８月１３日（木）

快晴
アタック隊快調に登はん，ＢＣより双眼鏡で確認できる
ポベーダ西峰（７０００ｍ）にＣ５設営
今日は完ぺきな無風快晴の１日
トレッキング隊対岸キルギスタンキャンプへ
岡谷班は５６６４ｍピークへ向け出発

８月１４日（金）

快晴
トレッキング隊ズビョードーチカ氷河取り付きまで往復
午後より雲が出てくる　ポベーダに笠雲の気配

アタック隊オベリスクのコルを過ぎ本峰ピークへ登はん中，場所により胸までのラッセルの連絡あり（１４：２５）
今日はツェルト泊の予定で火気・食料もあるとのこと
天気下降中，Ｃ２より上に雲が掛かり始める（１７：００）
アタック隊登頂を断念しコルまで引き返して泊

８月１５日（土）

晴　ポベーダは笠雲
辻の消耗がひどい様子
Ｙ隊の２名は天気を見てアタックをかけたいとのこと
稜線上はホワイトアウトで動けないらしい
午後薄曇り，中腹より上は雲の中
小雨（１５：０４）
カズベック側にサポート（ガイド隊）出動の要請

今朝の連絡では，４，５時間でビバーク地点（コル）到達可能とのこと
副隊長今日はその位置を動くなの指示送る
２０：００の定時連絡によると，独自判断にて稜線上の雲が切れたときを見計らい、Ｃ５手前１／４地点付近まで退却，再び見通しが効かなくなったので，ここでビバークに入るとのこと
サポート隊は，湿雪と雪崩で５７００ｍ地点から動けないらしい
小雨（２２：４８）
今日は徹夜で無線監視，堀内と江崎交代（３：００）
雨　時折遠くに雪崩の音（４：２１）

８月１６日（日）

雨
アタック隊より連絡（６：３７），ホワイトアウトで動けない
天候を見て今日中にＣ５へ戻る予定とのこと
霙から雪に変わる
１４時頃より雪雲が一気に晴れる

天気回復傾向の旨アタック隊に連絡
すでにアタック隊も移動準備に入っているとのこと
一安心
安心も束の間，胸までの積雪で１００ｍしか進めない旨の連絡あり
ヘリ便到着，ヘリによる急遽の救助を要請
７０００ｍにヘリは上がれないと一蹴される
残るはガイド隊の救援を待つしかないが，先発の６７００ｍＣ４のガイド隊は昨日以来動けていない（まともにテントも張れない状況らしい）
トレッキング隊コンダクター清水氏の通訳が心強い
岡谷班の田中・佐藤夫妻・坂本戻る
富永氏衰弱の様子，松平氏も取り乱し気味
今後の対応に関して協議
未だ冷静な判断のできる状況にある松島隊長の意見を尊重し，３日目のビバークを促す
中村が不測の３日目のビバークを前にアタック隊各員に再確認と決意を促す
明日ガイド６名（Ｃ４，Ｃ３の各３名）がＣ５へ上がるとのこと
カズベック側から連絡
昨晩までの反動の如くハンテングリとポベーダの夕焼けが美しい
今夜は冷えそう

８月１７日（月）

快晴
アタック隊からの連絡昨夜９時以降なし
松島より連絡あり（８：００）無事の様子にほっとする
衰弱のひどい松平を残し，松島・辻・富永の３名でＣ５へ移動中の旨の連絡
１２時過ぎ松島より２０分前にＣ５到着の旨連絡あり
手足の指凍傷の様子　詳細不明
１７時ごろヘリ到着，稜線上の松平氏に酸素ボンベ等物資投下
ＢＣにヘリ待機，カズベック側今後の対応検討中
ガイド２名が松平氏救出へ向かい，１名が松島ら３名にＣ４まで同行するらしい
２０時の定時連絡で松平氏とガイドが接触，投下物資も無事回収，Ｃ５の３名も無事Ｃ３に到着テントに入ったとのこと
一安心

８月１８日（火）

快晴　無風
日中は甲羅干しの陽気
１７時過ぎ松島隊Ｃ２到着
松平氏もＣ２へ向け下山中詳細不明
明日のＣ２からのアタック隊ヘリ輸送に関して，ガズベック側と行き違いがあり，強い抗議を含めたやり取りあり
どうも救助費用の支払に不安を持っている様子

８月１９日（水）

薄曇り
ヘリ到着（１１：４０）エンジンを止めて待機
Ｃ２のヘリポート整地を待って，ようやく４人が帰還
無事生還にほっとする
チーフダニエルの診察
何と最も疲労していたはずの松平氏は無傷
他の３名は３度の凍傷を負っている

無事生還　よくかえったな

８月２０日（木）

曇り

小雪（９：３０）天気下降気味

予定時刻になってもヘリ到着せず　（１０：００）

昼過ぎになってようやくヘリ到着

北ＢＣ経由，氷河を縫うように低空飛行にてカルカラへ

カルカラ

久々の緑が懐かしい

Ｄｒダニヨールありがとう

８月２１日（金）

カルカラからアルマティーへ

先に戻っていたトレッキング隊と合流

ホテル（ＯＴＲＡＰ）で夕食と休憩

深夜ソウルへ向け離陸

８月２２日（土）

ソウル経由にて広島着

生還者とガイドたち

６．登頂記（ﾊﾝﾃﾝｸﾞﾘ）（松島・堀内・佐藤）

７月２８日夜、明日からのハンテングリアタックのことを考えるとなかなか眠りにつくことが出来ない。目がさえ、出発までのあれやこれやとあわただしかったこと、子どもには学校を休むなと言っておきながら、当の本人が学校を休んで遊びである山登りに出かけたこと、富士山での高所障害等が次々と思い出される。また、チャパーエフ北峰への登りに苦労した自分が、果たしてそこより900メートルも高いハンテングリの頂に立てるものか。さらに、妻を残して行くことに対して後ろめたさ、もし自分たちの身に何かが起こりはしないかと．．．。しかし、他の隊員のみなさんは自宅に家族を置いてきておられるのである。自分は妻と一緒に登りに来ているのである。それを考えると自分は幸せ者だとつくずく思う。そんなこんなことを考えているといつしか眠りの中に入っていた。

７月３１日C3の夜、隊長から明日天気が良ければアッタクに出ることが告げられる。私は、疲れているため１日休養がほしいところであったが、天候がどうなるか分からないので、自分の都合ばかりでアッタクを延ばすわけには行かない。夜中私は頭痛のためなかなか寝付けず、結局うとうとするだけで朝を迎えてしまう。

８月１日。ああどうしよう。絶不調だ。朝食も少し口にしただけで出発の用意をする。天気は今日一日なんとかもちそうである。テントの外に出てアイゼンを着ける。動作が自分でも鈍いのが分かる。うーんこれが高所障害か。みんなに迷惑をかけてはならないと思い隊長の松島さんに「今日は調子が悪く無理かもしれません。」と正直に言うが、いけいけの隊長は私の言葉をまったく無視。私も「行けるとこまで行って、だめだったら引き返そう。」と心に決める。６時２０分出発。先頭の松島さんになんとか着いていく。６200メートル地点で休憩を取ったとき、ここで頭痛薬のバファリンを飲む。これで頭が少しすっきりし、これだったら頂上まで行けそうだと感じる。岩稜を所々馬のしっぽのように細くなったフィックスにたよりたくはないのだが、たよりながら登る。１２時過ぎ最後の難関クーロアールにさしかかる。一歩一歩が大変しんどくて、もうだめかと思う。しかしみんながんばっている。がんばろう。クーロアールを抜け最後の雪稜だ。頂上はもうすぐだと思っていたがなかなか着かない。２時間以上もかかり、やっとこさ念願の頂上に１６時４０分着く。頂上にへたりこみ、しばらくぼーとしている。カメラを向けられやっとヤッケの胸から教え子がくれた寄せ書きを出し、胸の前に広げる。うれしいよりもただしんどいだけだ。１７時に下山を開始する。頭ははっきりしているのだが足がふらつき、中村さんにロープを着けてもらい一緒に降りてもらう。自分が情けないやら悔しいやら最低の気分だ。途中雪も混じりヘッドランプをつけC3に向け下山を続ける。みんなふらふらで少し進んでは立ち止まる。わたしは中村さんに叱咤され、鉛のように思い足を一歩一歩ひこずりながら降りる。クソー、こんなはずではないぞー。ウー、体が動かない。もう高所登山なんかするもんか。自分の力のなさを忘れぶつぶつ心の中で叫びながら22時40分、やっとC3にたどり着く。本当に長い一日であった。

しかし、本当の登山はこれから待ち受けているのであった。C3からの下山で私は、チャパーエフへの登り返しは何とかなったのであるが、C2への下山で足がふらつくようになり、皆さんに助けられて下山す

ることになってしまった。山は、登りよりも下りが大切と言うことが身をもって痛感した。（佐藤　建　記）

登頂記（ハンテングリ）

7月29日　時天　今日からアタック開始ということで、江崎、辻、佐藤建、堀内の4人でC1入り、明日松島、中村が一気にC2入りということになる。

12:30　BC発。北イリニチェク氷河を渡って13:10取り付き。天気よく暑い。

15:10　グズグズの雪面を全員快調にC1着。テントが先日折れたポールの所でつぶれていたが、4人なのでなんとかなりそうだ。外国隊含めて20人近くいる。お湯を沸かして落ち着く。

7月30日　6:30起床。今日もいい天気だ。9:20C1発。まずまずのペースで歩く。雪もなんとかクラストしており、先日の荷揚げのときより楽に歩けるがこれくらいの高度になるとやはりきつい。イングランド隊を追い越し15:10C2着。今シーズン初の登頂者であるG登攀クラブの3人と出会い、握手を交わす。皆疲れているようだ。松島、30分遅れでC2着。中村もやがて到着しメンバーが全員揃う。しかしなんというスピードで登ってくるのだろう。

7月31日　8:30C2発。最初快調だったがそれも2時間ほど。重荷を背負ってのユマーリングが苦しくて、もうヘロヘロとなる。チャパーエフ直下のロックバンド帯ではほとんどテンションかけっぱなしで、なんでこんな苦しい事やってんだろうと泣きそうになる。それでもなんとか13:15チヤバーエフ北峰着。休む間もなくC3へ。14:30C3へ下り終えたが、今回の山行中一番苦しい1日となった。

もう登れなくてもいい気持ちだ。早くBCに帰りたいとまで思ってしまった。

8月1日　4:30起床。昨日は少し泣き言が出てしまったが、天気が良い。このチャンスを逃して天気が崩れたら、と思うとだんだん元気が出てきた。極力荷物を軽くしたいのでザックの雨蓋をはずして、NHKのビデオカメラ、テルモス、行朝食、替えの手袋をつめ6:20C3発。

C4の地点までは一部フイツクスはあるもののわりと歩きやすい岩稜ではあるが気は抜けない．C4地点から上部は様相が一転し、岩場の登攀となる。長い長い岩壁帝をひたすらユマーリングを続けるが、息が苦しい。いくらフイツクスがあるといってもきちっとしたアイゼンワークが出来ないと登れない。クーロワールを抜けてからの雪稜が長い。5～6歩進んでは10呼吸ぐらいしないと次の足が出ない。

16:30ごろ次々に頭上に着く。なにかあまり感激はないが、とにかくやっと7000メートルに立ったんだ

という感じだ。写真、ビデオを撮り早々に下山を開始する。風が強く寒くなってきた。佐藤、調子悪く、少し時間がかかり暗くなり始めた。ルートが分からなくなってビバーグでもしなければならなくなったら、それこそ大変なことになるので、とにかく下る。BCでもかなり心配しているようだ。

22:30ごろ全員無事C3着。テントの前でへたり込んでしばらく動けなかった。砂糖をたっぷり入れたお茶だけ飲んで、24時すぎ泥のように眠る。

8月3日　C3にて休養。　14時すぎより雪が降り続く。

8月3日　8:30C3発。チャパへの登り返しが結構きつかった。チャパ北峰で登頂の感激をゆっくり味わって、下降を開始する。ラッペルと腕がらみを繰り返し、ひたすら下る。C2にてデポ品を回収し再び下るがあ

まりの荷の多さに、何度も何度も転倒しながらへとへと状態でC1着。BCに残った他のメンバーがC1まで迎えにきてくれて、全員でくさった雪のなかを無事BCに帰る。

テントで田中氏とウォッカ3杯飲んだまではよかったが、その後意識不明状態で寝てしまった。

■　　堀 内 記

ハンテングリ登頂記

８月０１日　４時半起床。夜中星が出ていたが、天気は曇り。うどんを食べて6時20分出発。高度が高いのと寒さのせいで動作が緩慢になっている。最初ラッセルは深いが直に浅くなる、岩稜と雪のミックスである。傾斜のきついところはフィクスロープがある。しかし、ロープの痛み具合はより一層ひどくなる。でも、ありがたいもので、無ければ倍も3倍時間がかかるのである。感謝、感謝！午前10時C4到着、標高6400m。労山の北沢氏の追悼レリーフが岩に設置してある。彼はチャパーエフ北峰の下りで墜落死している。ここはテントの残骸や装備類が残置されている。陽が当たらず大変寒い、後続を待つ間に持ってきた羽毛服など全部着る。岩稜の傾斜は益々きつくなる。頂稜直下のクロワールに入る。高度のせいか2～3歩、登ると暫く動けず呼吸を繰り返す。とにかく、しんどい。ロシア人ガイドが我々を追い抜いていったが、クロアール上部でもう下りてきた。彼は、１１度目の登頂だという。あきれた。頂上直下の雪稜に出るが遅々として進まない。スノーレパードのロシア人にまた抜かれる。辻先頭で頂上到達、頂上前で待っている、私に先に頂上に立てという。感謝！午後4時20分登頂。4時40分全員そろい。記念撮影、本当にしんどかった。ビデオをまわす。７０１０mだ。あれほどこだわった7000mだったが、下りの心配が先にたちあまり喜べない。周りの山はガスで隠れ次なる目標のボベーダだけが雲の上に顔を出している。午後5時下山開始、日没まで5時間余りとなる。少し登りに時間がかかりすぎたようだ。下りはじめて佐藤の異変に気づく、足元がふらついている。前後でサポートしながら下りるが時間がかかる。急な斜面ではラッペリング、緩いところは、カラビナをかけるだけでどんどん下るが、C4で午後8時。C3のコルの雪稜まで下りてくると暗くなった。ヘッドランプをつけ、10時20分C3到着。全員フラフラ。佐藤のサポートは中村氏が一手に引き受けてくれた。中村氏がいなかったら危ない状況であった。隊長の私は自分のことで精一杯、余裕なし。この日は皆疲れて飯もろくろく食わずに寝てしまう。でも良かった良かった。6名全員登頂できたし、無事C3まで帰ることができた。我々の力量からだとギリギリの挑戦であったようだ。

８月０２日　今日はC3で休養とした。スイス隊4人とブルガリア隊2人がアタックしている。スイス隊は朝5時の出発である。8時半の交信の後朝食。午前中は快晴、午後からはハンテングリにガスがかかる。チャパを越えて新たに10人位C3入りしてくる。南イリニチェク氷河からも5人位上がってきた。全員寝て過ごす。ブルガリアの2人は夕方明るい内に余裕で帰ってきた。本当に強い。スイス隊は9時半、日没ギリギリで帰ってきた。「コングラチュレーション」と声をかけると「セイムツーユー」とかえってきた。隊員は昨日の登頂を喜んでいる。私は隊長として余裕が無かったことで少し落ち込み気味。明日のチャパの上りがしんどいだろう。

８月０３日　6時起床。テントの撤収に時間がかかる。8時半の交信でわかったのだが、スイス隊の男性1人が調子悪いらしく、ヘリでのレスキューを要請している。我々は重荷にあえぎながらチャパ北峰頂上を目指してラッセルを続ける。トレース跡をはずさないようにがんばるも、アタックの疲れがひどく、

遅々として進まない。30分後ヘリが飛来しC3でのホバリングとピックアップを試みるが何度も失敗し、4回目に成功。2人の登山者を乗せカルカラへ飛び去った。頂上までのラッセルは元気のよい辻ががんばる。頂上到着11時、ビデオと写真を撮りC2に向けて下山。フィックスの所でイギリス隊と千葉隊が上がってきて時間をとられる。佐藤C2直前でフラつき始める。C2を撤収し、9人分のデポ品とテントが増え重荷で全員メロメロ状態。16時にC1にたどり着く。雪が柔らかくアイゼンの下ですぐダンゴ状になり、登頂の疲労と重荷が重なり大変危険であった。BCから3人がサポートに上がってきた。C1直下のフィックスで松島足を滑らせズルズルと支点まで落ちる。相当疲れている。19時過ぎBCに到着。ユーリーが暖かく迎えてくれた。ビールで乾杯！本当にしんどい下山であった。こんなしんどい下山はいまだかって経験したことがない。　　（松島）

７・生還記（ﾎﾟﾍﾞｰﾀ）

ボベーダ峰（７４３９ｍ）での遭難及びレスキューの概要

8月6日　ハンテングリ北面BCよりヘリで南面BCに移動。

8月7日　BCにて装備、食糧の点検。ボベーダ峰への登頂メンバーは松島、中村の3名に決定済み。本日、東京YCCの松平冨永パーティがC1へ向けて出発したが、松平氏の体調不良のためBCに帰着。松平氏の要請で富永氏を我々のパーティに参加させてくれとのこと。明日からは我々3名に冨永氏を加えた4名でのアタックと決定。BC残留の佐藤建、堀内、江崎の3名がC1までのルートに赤旗をつけてくれた。

8月8日　松島、辻、中村、冨永の4名で出発。ズビョースドチカ氷河をさかのぼり、C1（4400m）に入る。三分の二は氷河の右岸のモレーンを快適に遡ったが、三分の一は氷河上のクレバスと川を避けながら迷路であり、ルートファインディングに苦しむ。C1は小さな氷河湖のそばであり快適そのもの。氷河は先行パーティのトレースが所々残っているがトレース上でもヒドンクレバスがあり油断できない。

8月9日　松平氏体調回復しBCを出発、C1に入る。4名はC1を出発しディンキー氷河末端のセラック帯を通過しディンキーコルに達し、C2（5200m）を設営。中村氏不調を訴え遅れ気味。松島セラック

帯でヒドンクレバスに落ちるもザックがひかかり事なきを得る。

8月10日　夜半から雪になり、20㎝の積雪、ガスもかかっているので停滞とする。5700mでルート整備をしていたガイド6名とG登攀クラブの須藤、古屋野、山口の3名はC3が雪崩にあったとかで、BCに向けて下山していった。松平氏C2入りし5人パーティとなる。

8月11日　5700mまでは雪稜のラッセル、2ピッチ登ったところで中村氏体調不良の為BCへ下山。ハンテングリで無理してもらった疲労がまだ抜けきれてないようだ。4人パーティとなる。今まで豊富な経験で未熟な隊長の私をサポートしてくれた中村氏が離脱することは大変な痛手である。悪い予感めいたものがよぎるが払拭し自らを鼓舞する。ガイドのルート工作と整備（フィックスロープの掘り起こし）は5800mで終わり、以後は自力でルートを探さなくてはいけない。岩稜帯のフィックスロープを掘り起こしなc

C2

がら6000mまでの第一岩稜帯を突破。再び雪稜となり、腰から胸までの壮絶なラッセルを吹雪の中がんばり第二岩稜基部6100mのC3に19時頃到着。天気は回復し快晴となりBCやハンテングリ峰が望める。

C3

8月12日　快晴、第二岩稜突破に手間取り6450mの大岩の下にC4設営。第二岩稜取り付きで我々のすぐ左を表層雪崩が落ち肝を冷やす。岩稜突破は松平富永両氏がトップで頑張ってくれて本当に助かる。今日は350mしか高度が稼げなかった。夜、明日中に稜線にでることを皆で誓う。BCにはトレッキング隊が入ってきた。夜6時の交信で種村会長の声を聞く。トレッキング隊のヘリでガイド3名がC2（5200m）入りした。4人とも高度順応は順調のようで十分睡眠がとれた。

C4への登り

C4

8月13日　4時起床。朝から快晴、6時半に出発し夕方なんとかバーシャプシャベラ峰（ボベーダ西峰）6918mを越えてC5設営。西峰直下の雪稜は

雪が深くラッセルに苦労した。尾根がなだらかで傾斜もきついので新雪がついた時は要注意である。又、下山時にルートが判りにくく赤旗を何本も立てておく。この稜線は中国とキルギスタンとの国境であり、無線機に中国の軍隊と思われる交信がバンバン入ってくる。ボベーダ本峰は4キロ先すぐそこに見える。標高差は500mだが、距離があるのが気になる。夜、協議の結果、明朝C5より長駆頂上アタックと決定。引き返しの目途は午後3時とする。7000mレベルでの睡眠は少々不安であったが、全員快眠できた、高度順応に問題なし。

C5よりポベータ山頂を望む

8月14日　C5（6900m）より頂上アタック。快晴、6時半出発、稜線は意外と雪が柔らかく膝ぐらいまでのラッセル。とにかく寒い。気温マイナス30℃。高所でのラッセルに苦しみ予想以上に時間がかかる。11時オベリスクのコル到着、コルから急な雪壁を直上し岩稜帯に入る。岩稜には古いボロボロのフィックスロープが残っており問題なく通過できる。しかし、大岩を超えた雪稜（頂上直下7250m）で胸までのラッセルを強いられ進退窮まる、午後5時本日の登頂を断念する。C5に帰着することを変更し50m下った大岩の下に入りビバークする。翌日早朝に登頂しC5に帰着と考えた。頂上は目前であり天気もよく4人とも比較的元気であったことが、予定を簡単に変更させた。このあと訪れる地獄の三日間を誰も想

C5より4kmの稜線を進む

像さえしなかった、明日は頂上立てると思っていた。ツエルトに入りガスコンロで一晩中暖をとり仮眠する。松島、辻はシュラフカバー持参であったが、YCCの二人は持参せず、ツエルトも我々のものより小さく封筒型のものであった。我々二人それほど消耗せずに朝を迎える。

8月15日 朝風強く視界悪い、悪天のため登頂を断念、C5に帰着することを目指す。オベリスクのコルに下りてから天候は一層悪化し吹雪となる。強風とガスによる視界不良の為オベリスクのコルから約1kmの稜線上にて行動不能となり、再ビバーク。ガスボンベはすでになく、水が作れないのが痛手であった。一晩中吹雪、雪をかじりながら朝まで耐える。我々二人はツエルトとシュラフカバーのおかげでさほど消耗しないがYCCの冨永が目に見えて弱ってきた。

8月16日 吹雪、午前中約2時間（1．5km）位ラッセルし、C5に近づくが、強風の為断念、ビバーク態勢に入る。2時間位かけて雪洞を掘る。午後一時的に視界が良くなり雪洞を後にするが、約30分で断念、再度ツエルトをかぶる。冨永の消耗が著しく危険な状態と判断し我々のツエルトに入れ、シュラフカバーも与える。松島かわりに、YCCのツエルトに移動。BCとの交信でガイド達がC4まで達している事を知る。ボベ西峰直下の雪稜で雪崩が頻発しC5になかなか入れないらしい。BCとの交信でいろいろな人がはげましてくれるのが本当にありがたい。

一晩中猛吹雪、ツエルトに雪が入り込み、松平、松島共に激しく消耗。松平は足の凍傷を心配して靴を脱いで足の指を口に入れ凍えた指を溶かしている。たくましい奴だ。朝までもてるか不安であった。家族の顔が次々浮かぶ。朦朧としながら最愛の妻にテレ

パシーを送り続ける。なんとか４人とも生きたまま朝を迎える。富永はツエルトとシュラフカバーのせいか回復する。

8月17日　午前中吹雪、午後より天気回復、視界も良くなる。目前のC5を目指すが歩き初めてすぐ松平歩行不能となる。ここまで抜群の体力と技術で常に先頭を切っていた彼が腰砕けで立てないのである。7000mを超える高所での簡易ツエルトでシュラフカバーなしのビバークが彼を消耗させてしまったのだろう。松平「なんで歩けんのや。!!」と悔しがるがどうしようもない。我々３人も立って歩くことが精一杯で彼を連れて行く体力は残っていない。富永は松平に付き添って残ると主張したが、隊長判断で認めず、稜線上で松平にツエルトをかぶせ救助することを約束し、３名でC5に向かう。ラッセルを続け約2時間でC5到着。丸三日まともに水分を取っていなかったので水を作り飲みまくる。直後にガイド2名がC5に到着する、余裕のない我々はガイドに松平の救助を依頼する。１時間後、４名のガイド到着。我々３名は直ぐに下のキャンプに下山するよう促される。消耗しきっている我々はC5で休みたいと抵抗するが、まったく聞き入られない。渋々テントを撤収し、ガイド2名に付き添われて6700mのガイドのテントまで下がる。C5からガイド4名が松平救出に向かう、ヘリコプターから酸素ボンベと薬品を投下。7000m稜線すれすれの所を飛ぶヘリの窓からカズベク氏とトレキング隊のツアーコンダクター清水氏の顔が確認できる。松平は動けず、その場に雪洞を掘って収容され、尻に注射（アドレナリンか?）を打たれ朝まで酸素を吸う。松平回復し歩行可能となる。

8月18日　松島、辻、冨永はガイド2名にサポートされて一挙に1500m下山してC2（5200m）まで到達。松平もガイドのサポートで5700mの雪洞まで自力で下山。C2の3名両手両足に凍傷の水疱が生じ行動が不自由となる。松平酸素を一晩中吸ったせいか凍傷の程度が4人の中で1番軽い。
BCより無線で明日C2よりヘリでピックアップすることが伝えられる。

8月19日　松平C2まで下山し4名が合流。12時頃ヘリで我々4名とガイド4名がC2よりピックアップされBCに帰着。BCにてチーフのドクトルダニュエルに凍傷の応急処置をしてもらう。BCには残留組の7名とトレッキング隊の種村会長、岡谷、田中氏らが暖かく出迎えてくださる、感謝感謝。無事生きて帰れたことを素直に喜ぶ。本当に良かった。

8月20日　BCを撤収しヘリでカルカラへ移動。日程ぎりぎりの生還であった。

8月21日　バスでカルカラからアルマトイに移動し、トレッキング隊に合流。手足の凍傷が痛み座薬でごまかす。

8月22日　アルマトイからアシアナ航空にてソウル経由で広島着。大勢の岳連関係者と家族に迎えられられる。凍傷の程度のひどい辻は広島市民病院へ松島は堀整形外科にその足で入院する。（松島）

8. 担当報告

Ⅰ　装備について　（堀内）

今回の遠征に際して装備面については過去の報告書等、かなりの情報を持っていたのであまり頭を悩ますことはなかったように思う。ただ航空運賃の予算的な面もあって、その重量については出発前に精度の高い計量器等を使用して極力軽量化に努めた。

個人装備については、各々耐寒性能や軽さの面でかなりの研究をされていたようでほぼ問題はなかったように思う。

その中で今回3名が使用したチタン製のアイゼンについては昨年、静岡隊が使用中破損した事実も含めて、その使用性能、安全性に問題があるように思われる。 またボベーダにおいて東京の2名とともに程度の差こそあれ手足に凍傷をおった隊員にミトン及び登山靴のインナーに違いがあった事も今後の参考にしたい。

その他の個人装備としては、この山域については基立的に日本の厳冬期仕様の装備でよいと思う。それに共同装備として8㎜×40㍍程度のザイルが3～4人に1本、（残置のフィックスについてはかなり消耗が激しく、ほとんど切れかかっている状態の所がかなり見うけられた。）緊急用としてスノーバー、アイスハーケン教本を持参した。

またヘルメットについて、その容量や重さの面で毎年必要の有無が問われているようだが、今回のメンバーのほとんどが使用しなかったが、いかなる場合も不測の事態を想定し着用すべきだったと反省している。

以下、今回の遠征に持参した装備品のリストを列記した。

共同装備

品　　名		仕　　様	重量kg	数　量	合計重量kg	備考
テント	ダンロップ	5～6人用	6．14	2	12．28	
テント	ICIゴアライト	3人用	3．42	1	3．42	
スコップ			0．85	2	1．70	
スペアフレーム			0．20	1	0．20	
ペグ						
ツエルト	イスカ		0．55	2	1．10	
EPIヘッド			0．50	2	1．0	
EPIヘッド	チタン		0．15	2	0．30	
EPIボンベ		空ボンベ	0．12	34	4．08	
コッヘル		大	1．33	1	1．33	
コッヘル		中	1．07	1	1．07	
ローソク			0．10	2	0．20	
コッヘル台			0．13	2	0．26	
スノーソー			0．25	2	0．50	
クライミングロープ		8.5㎜ ＊ ５０ｍ	2．50	2	5．00	

アイスバイル			0. 80	2	1. 60	
デッドマン			0. 30	1	0. 30	
ｽﾉｰﾊﾞｰ			0. 35	2	0. 70	
ロックハーケン			0. 05	2	0. 10	
トランシーバー			0. 25	2	0. 50	
ビーコン			0. 25	9	2. 25	
医薬品セット			1. 00	1	1. 00	
食　　料						食料欄参照
合　　計					38. 89	

個人装備

品　　名	数量	重量kg	備　　考	品名	数量	重量kg	備　　考
ザック	1	2. 70		カラビナ	5	0. 26	
シュラーフ	1	1. 68		スリング	5	0. 30	
シュラフカバー	1	0. 48		ストック	1	0. 59	
マット	1	0. 48		ヘルメット	1	0. 27	
羽毛下着上下	1	0. 37		ATC　プーリー	1	0. 31	
ｵｰﾊﾞｰｼﾞｬｹｯﾄ	1	0. 80		ナイフ	1	0. 15	
オーバーｽﾞﾎﾞﾝ	1	0. 75		ヘッドランプ	1	0. 12	電池含む
スパッツ	1	0. 25		予備電池			
オーバーﾐﾄﾝ	1	0. 30		テルモス	1	0. 50	
靴下	3	0. 30		水筒	1	0. 06	
ゴーグル	1	0. 08		食器	1	0. 19	
高所帽	1	0. 20		ｽﾞﾎﾞﾝ	1	0. 20	
下着（上）	1	0. 30	オーロン	シャツ	1	0. 30	
下着（下）	1	0. 25	オーロン	上着	1		
ﾊﾟﾝﾂ	1	0. 06		タオル	2		
羽毛ﾍﾞｽﾄ	1	0. 54		洗面具	1		
プラブーツ	1	2. 50		ペーパー			
クランポン	1	1. 10		筆記具			
アイスアックス	1	0. 78		リップクリーム			
ハーネス	1	0. 48		日焼け止め			
登降器	1	0. 25		帽子キャップ			
8環	1	0. 20		カメラ	1		
手袋	2	0. 22	厚手	フィルム			
手袋	1	0. 06	薄手				

Ⅱ　医療　担当　佐藤　建

今回パルスオキシメーターを持参し、ハンテングリ登頂まで毎朝隊員の健康ﾁｪｯｸを行った。パルスオキシメーターが示す値は、高所の影響を色濃く映し出していた。全員に言えることは、高度が上がるにしたがい、値は確実に下がっていった。また、順応が出来るとその高度での値は以前のものから値が上昇していった。体感的にもそれは感じることが出来た。これからの遠征では、パルスオキシメーターを遠

征装備に必ず入れ、隊員の健康管理をし、登山に役立てて行くべきである。ただし、個人差があるために事前に富士山での値を調べるなどしておいた方がよいであろう。

高度障害に関してSは、ハンテングリ登頂後、下山で足元がふらついたのは、明らかに高山症状であり、事故なく下山できたが、冷静に今考えると大変危ない状況であったと思う。さらに、ポベータでの7000メートルを超える高度で3ビバーグ後生還できたのは奇跡に近いものだ。凍傷にあったのも高所での影響も随分と影響していたのではないだろうか。水を体内に取り、血液の循環を多くしていればもっと違う展開になったのではないだろうか。また、凍傷の治療を収容されたキャンプで適切に行っておれば違ったのではと思うと大変残念である。

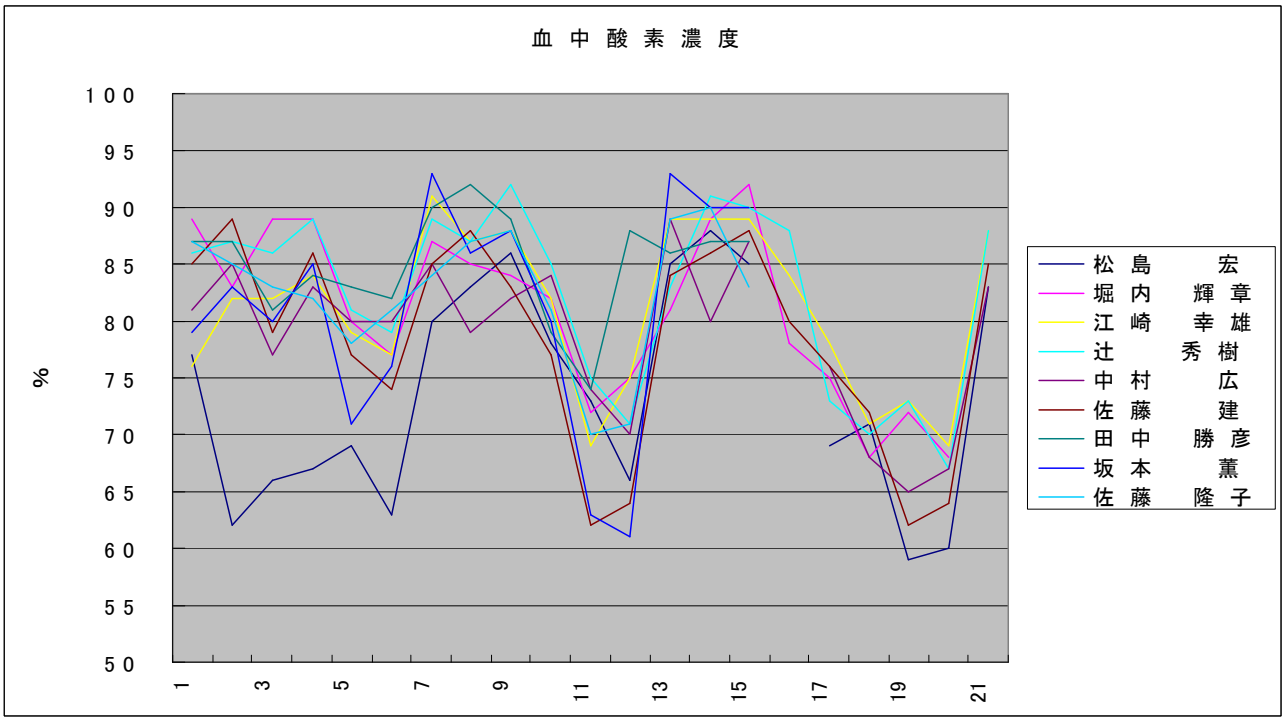
遠征中、胃腸の具合が悪くなる隊員が予想以上に多く、薬が足りなくなる状況であった。海外登山では胃腸薬は欠かせない。

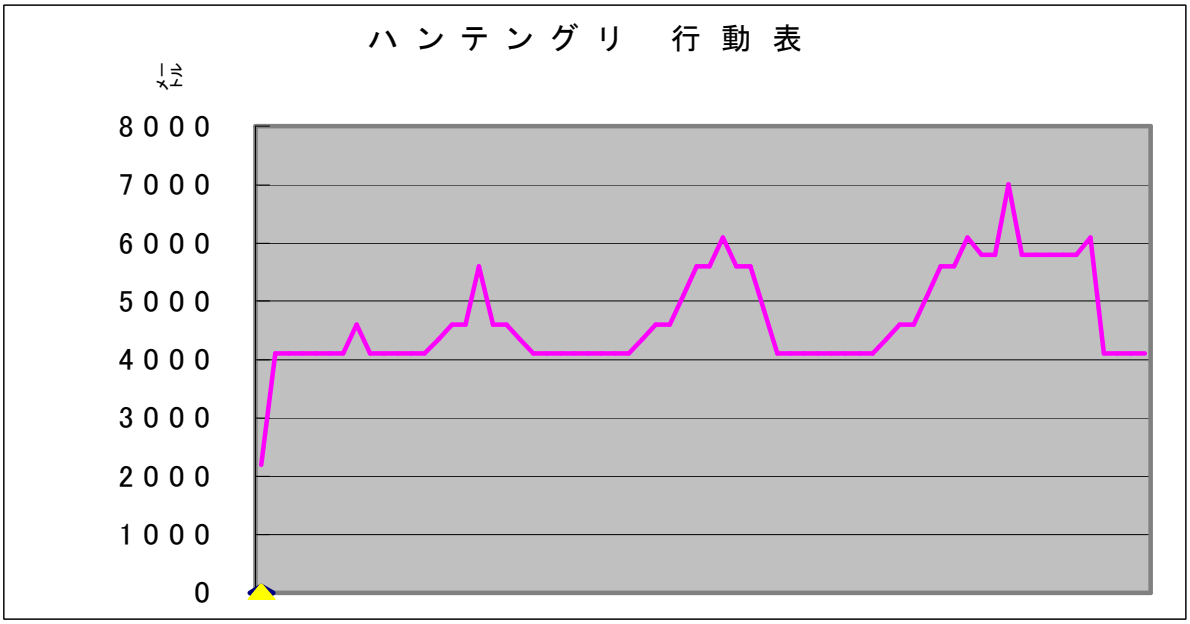
今回の遠征に関しては、白島クリニックの院長小峪ドクターから医薬品の手配ならびに薬の処方についていろいろと指導していただき大変役立った。

医薬品リスト

	種別	薬品名	服用法	数量
1	利尿剤	ﾀﾞｲﾅﾓｯｸｽ		1/2～1錠
2	感冒薬	PL	風邪の始まり	1包
3	頭痛・風邪	バファリン		1錠
4	解熱剤			
5	下痢・整腸剤	ポリラクトン		
6	下痢・整腸剤	リーダイA		
7	下痢止め	ミロピン		
8	解熱・痛み止め	ロキソニン		
9	消化剤	オーネスSP		
10	ｱﾚﾙｷﾞｰ・湿疹	ｾﾚｽﾀﾐﾝ		
11	胃炎	ソロン	アシノンと一緒に飲む	
12	胃炎・胸焼け	アシノン	ソロンと一緒に飲む	
13	胃腸の痛み止め	コリリック	きりきりした痛み	
14	化膿止め	リンデロン	塗り薬	
15	雪盲用目薬	リンデロン	点眼液	
16	痛み止め	ボルタレン	座薬	
17	ビタミンB	ｱﾘｱﾛﾝF		
18	滅菌ガーゼ			
19	包帯			
20	伸縮包帯			
21	消毒薬	イソジン		
22	バンドエイド			
23	目薬			
24	体温計			
25	聴診器			

26	ﾊﾟﾙｽｵｷｼﾒｰﾀｰ			
27	健康ﾁｪｯｸ表			





Ⅲ　気象　担当　江崎幸雄

過去の遠征隊の記録等から現地の気象状況は推測できていたが，問題は現地で天候の予測は可能か否か，これが気象担当としての課題であった。日本付近の気象資料に比べてヒマラヤや天山方面の資料は極端に少ない。また国内での観天望気の経験が果たして通用するのかも課題であった。現地での天気図の入手に関しては，仮に気象通報があったとしてもロシア語では論外で、結局可能な手段は気象ＦＡＸ受信装置一式を持参するか，現地に電話があればパソコンを持ち込みインターネット経由で入手するかの２通りしか考えられなかった。この度の様な小パーティーでの遠征は，持参する装備・食料の軽量化及び予算の縮小が最優先課題で、いずれも現実性がなかった。気象予報にウエイトを置くならば，衛星回線電話装置とノートパソコン及び小型プリンターを持参し，インターネットで気象ＦＡＸデータを入手すべきというのが結論である。衛星回線電話およびインターネットの利用は，気象以外に留守本部との連絡など用途も広く利用価値は高いと思う。

結局，気圧計（高度計）と温度計のみの気象データ収集と観天望気による予測の可否を確認すること、これが気象担当の仕事となった。

今回、天候判断の誤りに起因する遭難騒ぎを起こしてしまったが，後日その期間の北半球５００ｈＰａ高層天気図を見ると，天山西方に低気圧とそれに伴うトラフが解析されており，３日続いた晴天後の悪天を予想できていたはずで大変残念に思う。

※　インターネットを活用しての気象衛星画像入手いう非常に強力な天候予測手段もあるが、リアルタイムで画像を入手できるのはＧＭＳ（ひまわり）とＭＥＴＥＯＳＡＴ（ヨーロッパ）で、いずれもカザフスタン方面は十分カバーできていない。ＧＯＭＳ（ロシア）の画像が入手できるようになれば、ヒマラヤ・テンシャン方面の予報は相当精度が上がると思われる。

北ＢＣ及び南ＢＣ滞在中の天候の記録（7/14～8/20）

7/14(火)				7/15(水)				7/16(木)				7/17(金)				7/18(土)				7/19(日)				7/20(月)			
快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	晴	晴	曇り	雪	雪	曇り	晴	晴	快晴	晴	晴	ガス	ガス	薄曇	小雪	小雪	薄曇	晴	晴	小雪
カルカラから北BCへ移動												20cm															(定)

7/21(火)				7/22(水)				7/23(木)				7/24(金)				7/25(土)				7/26(日)				7/27(月)			
曇り	曇り	薄曇	快晴	雪	曇り	小雪	小雪	小雪	小雪	小雪	曇り	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	快晴	晴	曇り	曇り	雪	雪	曇り	晴
				3cm																				3cm	10cm		

7/28(火)				7/29(水)				7/30(木)				7/31(金)				8/1(土)				8/2(日)				8/3(月)			
薄曇	晴	晴	小雪	晴	快晴	晴	小雪	快晴	晴	晴	晴	快晴	晴	ガス	ガス	薄曇	ガス	ガス	雪	快晴	晴	ガス	ガス	快晴	快晴	晴	曇り
			(定)																								

8/4(火)				8/5(水)				8/6(木)				8/7(金)				8/8(土)				8/9(日)				8/10(月)			
曇り	曇り	小雨	曇り	晴	晴	曇り	小雨	薄曇	晴	曇り	雨	曇り	霧雨	晴	晴	晴	晴	晴	小雨	小雨	曇り	薄曇	雨	雪	雨	薄曇	雨
								北BCから南BCへ移動																			

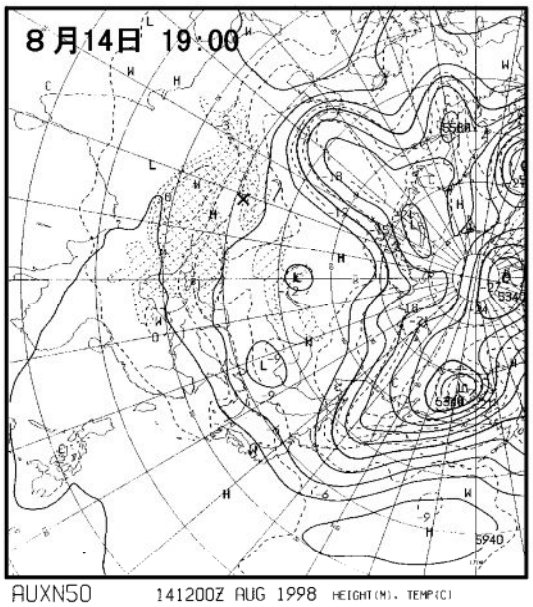
8/11(火)				8/12(水)				8/13(木)				8/14(金)				8/15(土)				8/16(日)				8/17(月)			
曇り	晴	晴	小雪	快晴	快晴	快晴	晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	晴	薄曇	薄曇	晴	小雨	雨	霙	雪	霙	晴	快晴	快晴	晴	曇り
			(定)																		5cm						(定)

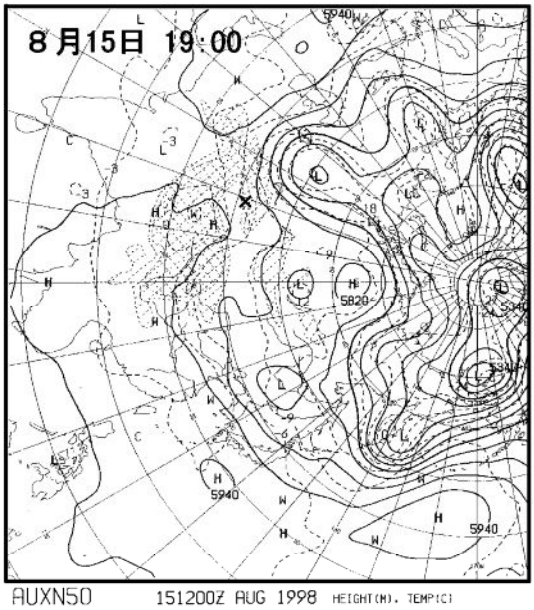
8/18(火)				8/19(水)				8/20(木)			
快晴	晴	晴	曇り	薄曇	晴	曇り	薄曇	薄曇	曇り	曇り	曇り
			(定)					南BCからカルカラへ移動			

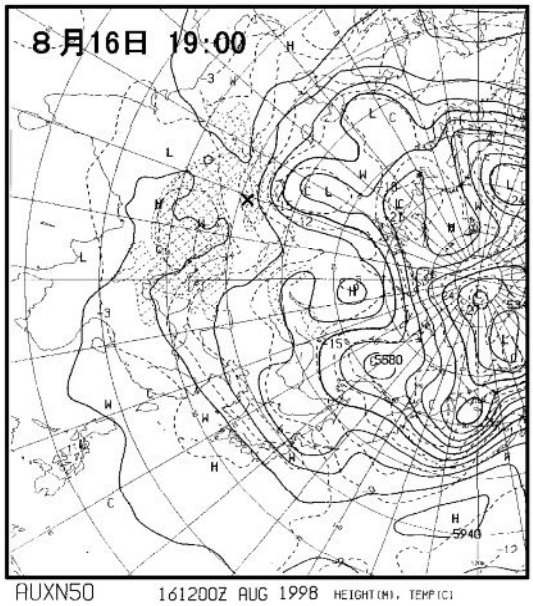
斜線部分は登山行動中の各地点での記録を示す。

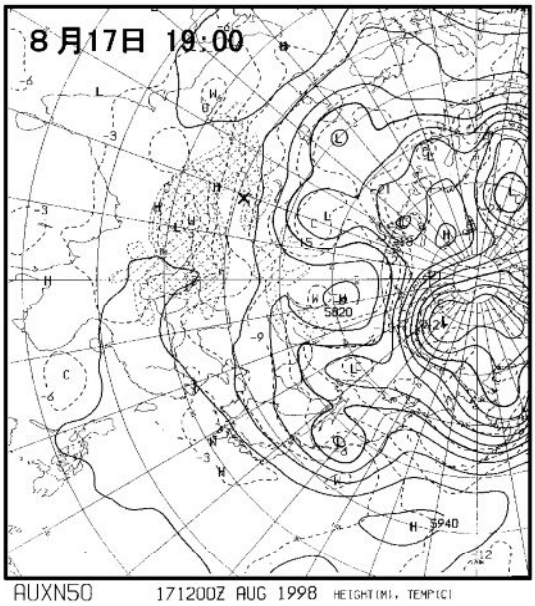
（定）は定期便（夕刻の短時間の天気の崩れ＝夕立ち）を示す。

８／１４～８／１７の北半球５００ｈＰａ高層天気図









×印は南ＢＣの位置を示す。

（１）４１００ｍにおける観天望気

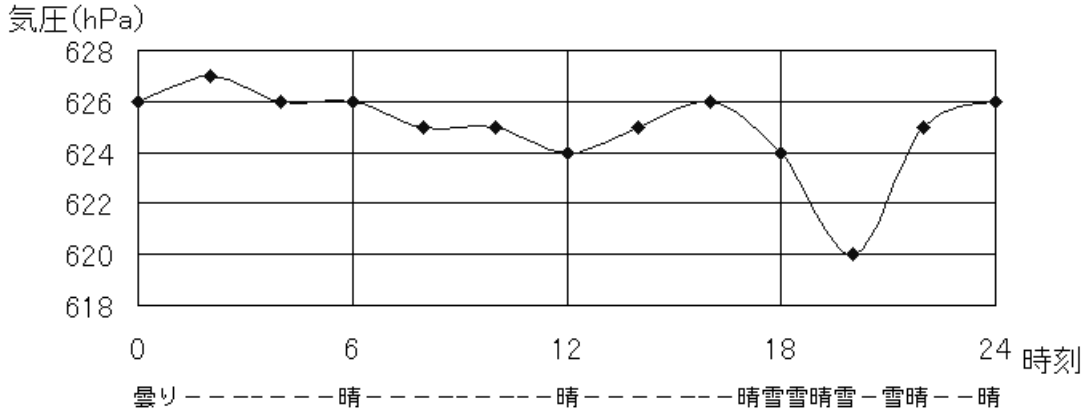
当然のことであるが，低気圧や気圧の谷の接近に伴う天候の変化は，観測地点がすでに中層雲高度にあるため，中層雲からいきなり降雨・降雪という変化になる。巻層雲から高層雲に変化したら間もなく雪あるいは雨である。また山脈が東西に走っていることも影響してか，上空にはほぼ定常的に西風が吹いている。従って天気の変化も西からやってくる。国内と変わらない。

上空の風向と天気推移の関係を見たが，西風が北よりの風に変わると天気が崩れる傾向にある。ただ極端に北風になると快晴が続いている。上空の風向と高層天気図との関連は読み取れない。チベット山塊が高層の気流の乱れる原因でもあり，そこに位置する天山山脈にあっては、上空の雲の流れと天気の関係を読むのは難しいのかも知れない。

（２）定期便（夕立様の気象変化）について

静岡隊の報告書にあった定期便が，南ＢＣで顕著に見られた。西方より対流雲がやってきて，雪と突風を伴って時にテントを壊したりした。東西に走る山脈の南面で発達した積乱雲が，上空の西風に流されてやってくるものと思われる。日中の強い日差しと上空の寒気が発生の要件となる様だ。次に 8/11 午後の定期便通過に伴う気圧変化を示す。

８／１１（１日）の気圧の変化



（３）気圧変化と天気の推移

気圧変化と天気の推移には，余り顕著な関係は見られなかった。後日５００ｈＰａ高層天気図で確認しても，天山山脈付近に顕著な気圧の変化は生じていない。天山の西方カスピ海あたりまではっきり形をなしていた低気圧やトラフも，チベット山塊に近づくと不明瞭になってしまい，気圧変動から低気圧やトラフの接近を予測することは難しいようだ。

（４）その他

①　ＢＣから見て雲の中は，粉雪の中

考えてみてば当たり前だが，経験してみて初めて納得したこと。

ＢＣから見て雲の掛かっている稜線は，ガスでなく粉雪の吹雪である。雲は水滴でなく氷晶であり，雪が横から降っている。テントではサラサラと雪が吹き付けてくることになる。

②　笠雲は虹雲

ハンテングリの笠雲は虹雲でした。太陽との位置関係にもよるが，Ｃ２から見た笠雲は虹色を呈していた。また上空に彩雲が現れることも度々あった。聞いてはいたが見るのは初めてだった。

③　４１５０ｍでも雨

北ＢＣ（4100m）では、天気は晴か雪だったのが，南ＢＣ（4150m）に移動した途端雨になってしまった。ＢＣでの雨は予定外だった！　余裕があれば傘をお忘れなく！　後日５００ｈＰａ高層天気図で確認すると－７℃が雨か雪の境界らしい。

④　４０００ｍ以上の気温

北ＢＣにおいて，夜半から明け方にかけて最低気温－４℃を記録している。天候にも左右されるが，日没後は０℃前後になる。日中は晴天なら２０℃まで上昇する。曇りの日は５～１０℃である。

南ＢＣにおいては，最低気温－７℃，最高気温２６℃を記録している。とにかく日中と夜間の温度差は大きい。１日に冬と夏が同居している感じで，春と秋はない。南ＢＣではキャンプがモレーン上に設営されていたせいもあるだろう。

Ｃ１（4600m）での最低気温　－５℃

Ｃ２（5500ｍ）での最低気温－１１℃
Ｃ３（5800ｍ）での最低気温－１３℃　を記録している。
残念ながらハンテングリ山頂（7100ｍ）では温度計を忘れてしまい測定できなかった。とにかく冷たかったことは確かである！

⑤　地震について
静岡隊のレポートで地震のあったことは知っていたが，今回もやはり地震があった。７／２８　11:55　弱震　直後、北ＢＣ正面のハンテンクリ南面２箇所よりかなり大きな雪崩が発生した。アタック時と重ならぬことを祈るのみ。天山山脈はまだ生きている。

⑥　その他の記録

各地点での気圧
カルカラ：775hPa 前後　　Ｃ１
（4600ｍ）：587hPa 前後
北ＢＣ　：625hPa 前後　　Ｃ２
（5500ｍ）：512hPa 前後
南ＢＣ　：625hPa 前後　　Ｃ３
（5800ｍ）：500hPa 前後

各地点の経緯度
カルカラ　　：Ｅ79°11′56.1″，Ｎ42°40′48.3″
北ＢＣの位置：Ｅ80°10′02.6″，Ｎ42°15′01.4″
南ＢＣの位置：Ｅ80°06′20.2″，Ｎ42°08′37.2″

日の出・日の入時刻
北ＢＣ(7/14)：日の出　6:15，日の入　21:15
南ＢＣ(8/13)：日の出　6:45，日の入　20:43

Ⅳ食糧について〈坂本　薫〉

今回、アルファ米はすべて協賛ということで、食料費は１人 20,000 円*9 人=180,000 円とした。計画食糧を買った後、残金でまた副食等を購入したため、食糧の買い出しを終えて、最終的にパッキングすると全部で 120kg ぐらいになった。1 ヶ月半*9 人分の食糧であるが、日本から用意していくのは、BCキャンプでの食糧は必要ないため、登山中の食糧のみである。それでも、いざパッキングしてみると物凄い量であった。
あれだけあった食糧も、キャンプが終わってみると余ったのは手提げ袋に一杯で 3～4kg だった。今回ﾎﾞﾍﾞｰﾀﾞには、ほとんどの人が行かなくて、実際に登山で使用した食糧は、予定より大分少ないはずだが、BCで食べたり、日本人の他の隊にあげたりして思ったより減っていた。結果をみると、予定どうりにみんなが行動した場合、食糧が足りたのであろうか？と思ってしまったが、今回のようにBCに現地の食事がついていると、心配なくやりくりできたと思う。
行動中の食糧は、何度かみんなで試食をして決めたのだが、結果として、もう少しバラエティのある食欲を刺激するようなものや、ビタミンを意識的に取るようなものを考慮するべきだと思った。
高度があって疲れきった山の中で、お湯をかけるだけで(しぼったり、器に移したりという手間がなく)食べれて、軽いもの(そして安いもの)を見つけていきたいと思う。

行 動 予
定

			行動		朝	行動食	夜
7月	10日	金	広島～ｿｳﾙ～ｱﾙﾏﾃｨ				
	11日	土	ｱﾙﾏﾃｨ～ｶﾙｶﾗ				
	12日	日	カルカラ	カルカラ			
	13日	月	ｶﾙｶﾗ～ﾊﾞｽｶﾙｶﾗ	カルカラ		○	○
	14日	火	～ｶﾙｶﾗ	カルカラ	○	○	
	15日	水	カルカラ～BC				
	16日	木	BC				
	17日	金	BC～ＣⅠ～BC			○	
	18日	土	BC～ＣⅡ～BC			○	
	19日	日	BC	BC			
	20日	月	BC	BC			
ﾊﾝﾃﾝｸﾞﾘ	21日	火	BC～ＣⅠ～ＣⅡ	ＣⅡ		○	○
	22日	水	ＣⅡ～ＣⅢ～ＣⅡ	ＣⅡ	○	○	○
	23日	木	ＣⅡ～BC	BC	○	○	
	24日	金	BC				
	25日	土	BC				
	26日	日	BC～ＣⅠ～ＣⅡ	ＣⅡ		○	○
	27日	月	ＣⅡ～ＣⅢ	ＣⅢ	○	○	○
	28日	火	ＣⅢ～TOP～ＣⅢ	ＣⅢ	○	○	○
	29日	水	ＣⅢ～BC	BC	○	○	
	30日	木	BC				
	31日	金	BC				
8月	1日	土	BC				
	2日	日	BC～ＣⅠ～BC	BC		○	
	3日	月	BC	BC			
	4日	火	BC～ＣⅠ	ＣⅠ		○	○
	5日	水	ＣⅠ～ＣⅡ	ＣⅡ	○	○	○
ポベーダ	6日	木	ＣⅡ～ＣⅢ	ＣⅢ	○	○	○
	7日	金	ＣⅢ～ＣⅣ	ＣⅣ	○	○	○
	8日	土	ＣⅣ～ＣＶ	ＣＶ	○	○	○
	9日	日	ＣＶ～TOP～ＣⅡ	ＣⅡ	○	○	○
	10日	月	ＣⅡ～BC	BC	○	○	
	11日	火	予備日				
	12日	水	予備日				
	13日	木	予備日				
	14日	金	予備日				
	15日	土	予備日				
	16日	日	予備日				
	17日	月	予備日				
	18日	火	予備日				
	19日	水	予備日				
	20日	木	BC～ｶﾙｶﾗ				
	21日	金	ｶﾙｶﾗ～ｱﾙﾏﾃｨ				

	22日	土	ｱﾙﾏﾃｨ～ｿｳﾙ～広島			
				小計	12	19	12
				予備	5	5	5
			（1人分）	計	17	24	17
			（9人分）	合計	153	216	153

９．こぼれ話（雑感）

高度障害

私のハンテングリ峰への遠征は、メンバーのみなさんの助けを得て何とか終えることができました。本当に感謝しております。トレーニング期間を含め遠征では、本当にたくさんの経験をし、自分の人生でこれほど充実した日々はありませんでした。

ただ心残りは、全員が満足して遠征を終えることができたかと言うことです。

今、冷静に今回の遠征の反省をしますに、もう少し全員が満足できるようにはならなっかたかということです。ハンテングリ峰に幸い登れた６名は、いいのですが登れなかった３名について、我々がもう少し力になれたらと思うのです。３名には体力、技術、経験が足りないのはわかります。しかし、「全員でハンテングリを登ろう。」というかけ声で、一緒に練習を積んできたのですから、南BCに移動する前にみんなでよく話し合うべきではなっかったでしょうか？高度障害がひどかった私が言うのもおこがましいのですが、登頂は無理にしてもC3まで可能な限り入ってみるとか…・。そういう努力をしていれば違った形で遠征を終えることができたと思います。また、ポベータ峰での登山活動に対して、自分の力不足で何も出来なかったことが悔しいの一言につきます。

色々な経験をさせてもらいました。これを生かして、幅の広い山登り（人生）をしていきたいと思っています。（佐藤　建　記）

おなかグルグル

こぼれ話（南イリニチェク氷河ＢＣにて）

南北イリニチェク氷河上のＢＣは非常に快適な所で、トイレ、サウナ、キッチンまであり、いたれりつくせりの楽しい時を過ごした。

ただ悲しい思い出をひとつだけ残してしまった。

ハンテングリの登頂を果たし、南ベースに移動して間もない頃、食事の良さについ調子にのって食い過ぎてしまい腹具合を悪くしてしまった。ちょうどその日も朝からグルグル来ていた。

南ベースはテントからトイレまで 200 メートルぐらい離れているため心の準備はしていたものの、その日に限ってそいつは怒濤のようにおしよせてきた。

「こりゃあ間に合わん」ととっさに判断し、近くのモレーン上の川に一目散にかけこんだ。つもりだったが間に合わずパンツの中に少しでた。

「えーいままよ」とまわりを見渡し、その場にしゃがみこみ一気に放出。幸いあたりには

だれもいない様子。しかし紙がない．そのままの格好で 4～5 歩移動して川でケツを洗い、ちぢみあがった玉と一緒におさめて立ち上がりほっと一息ついて前を見た途端、なんとオーストリーから来ていたおっさんが、スッポンポンで行水をしているではないか。向こう
もびっくりしてあわてて前を隠す。「グーテンモルゲン」「モルゲン」とお互い、ひきつった顔を見合わせたのであった。
ちなみにこの事実は誰も知らない。（堀内記）

遠　征　人　生　の　弾　み

１９９７年、秋。「天山へ行こう！」突然の言葉だけれど、ずっと待ち続けていた言葉だった。それまでの6年間、「広島国体がすんだらどこかに行こう。」という言葉をたよりに国体成女監督の留守家庭を守り（？）過ごしてきた。その間、色々な人達と知り合えたり、練習や競技の本番を垣間見ることで数々の感動もしてきた。仕事もみっちりできて充実していたし、まずまず平穏な暮らしだった。ただ、大好きなスキーには身が入らず少々物足りない思いもあった。（ぜいたくー！）

「天山？」「カザフスタン？」「ハンテングリ峰？」「遠征？」自分とはかかわりのなかった言葉や聞いたこともない山の名前。今まで知らなかった世界の扉が目の前にある。岩登りは怖い、冬山は危険と避けていた私なのに、なぜか惹かれるのだ。自分の年齢、そして、ふたりだけではできないこと、それを思ったとき、食わず嫌いの私は怖いもの知らずの私に変身し、わくわくしながら１９９８年を人生の節目にするべく決心した。今がチャンス！！「天山に行こう！」

ＲＣＣのデレクターに「なぜハンテングリに登るのですか。」と聞かれたときにそれに対する答えが見つからなかった。なぜって、別にハンテングリでなきゃいけない理由はなにもない。ただ、弾みがついたのである。人生、時々こういうことがあってもいいではないか。とにかく私は行きたいんだ。

第1ステージ扉は開かれた

準備

Ⅰ〈　仕事　〉

７月１０日出発を実行するべく迷惑のかかりにくい方法を考える。結局、複数担任制のようなものである障害児学級の担任となる。

Ⅱ〈　家族の説得　〉

パートナー……一緒に行くので問題なし。
同居人……夫の両親は夫に任せる。
実家……「行ってくるからね。」の一言。わがままで向こう見ずな娘をいつもフォローしてくれた母に感謝。死亡保険金の受取人は実家の母にする。

Ⅲ〈　トレーニング　〉

付け焼き刃の受験勉強のようだったが、結構必死でやった。

①ランニング

自宅から黄金山山頂まで往復。いきなり始めたものだから半ばで大風邪を引いて一時休む。それでもまた復活して再会した。その後、年末のいろいろな行事のため中断。

②冬山

１２月２７日富士山初登頂。この山行を皮切りに、私はスキーを一度もはくことなく冬山に入り続けた。大山のバットレス、弥山尾根、頂上往復、こわーい縦走などなど。自分の目指していることがどれだけ大それた事かも知らず、今まで避けていたことに迷いもせず首を突っ込み（足を突っ込

み）はまっていった。知らないと言うことは全く恐ろしいことだ。かくして、「フィックス？」「ユマール？」「8の字結び？」の私は、夫に叱られながらも冬山のトレーニング自体を十分楽しむことが出来た。

③高所順応

4，5，6月の間5回の合宿で富士山に登った。1，2回目は体調が悪く、もどしたり、食欲不振だったりしたが、3回目以降ようやく体が慣れてきた。富士山に足繁く通ったおかげで、BCでも快適に過ごすことが出来た。

④メンタルトレーニング

自分では、完璧に自立していると思っていたが（ちなみに日常生活に於いて私はしっかり自立しており、時には“さとけん”の保護者でもある。）、しかし、こと遊びに関しては、夫に頼っていた私。今振り返ってみるとこのトレーニングが最大の難関であり、盲点であった。私が自立した山女であったなら、今回の遠征は違った展開になったかもしれない。けれども私は、普通のおばさんだった。好奇心旺盛で冒険好きの点を除いては。自然はそんなに甘くない。

⑤トイレ

（A）ハーネスをつけたままで用を足す。春山（八ヶ岳）でマスター。高所では、1日4リットルの水を飲まねばならない。当然、“自然が呼んでいる現象”も頻繁に起こるかもしれない。ペツルのハーネスは大腿部とウエストとをつなぐ後ろのゴムの部分が取り外しできるのである。見えないので手探りでやるのだが、何度かやると上手に出来るようになった。

（B）テントの中で用を足す。

高所で夜吹雪かれたりしたときのため。これは、携帯トイレ（小便袋）を薬局で買った。凝固剤を使うと捨てるときにゴミになるので袋だけ利用する　　ことにする。日本では、自宅トイレで場面を想定して練習した。テントやシュラフの中では練習をしなかったが、本番では「出たとこ勝負で女を捨ててやるぞ！」と意気込んではいたけれど幸か不幸か実行するほどの場面に遭遇しなかった。

⑥イメージトレーニング

もらった資料は隈無く読んだ。けれども、経験もない上に用語もわかりにくく半分も理解できたかどうかは疑わしい。ただ、登頂に成功したレポートは気合いを入れて読んだし、自分も登った気になり、ハンテングリが近くなったように思えた。（そこが落とし穴）

第2ステージ　　いざ天山へ

いつもの旅とは違ってもらったお守りをザックのヘッドにしっかり入れる。7月10日まだ1学期は終わっていない。だが、私の1学期は終わり今旅立とうとしている。全く私は幸せ者である。快く送り出してくれた同僚やクラスのお母さん方に感謝。これからどんなことが待ち受けているかも知らず、ただただ色々なことをクリアーして出発出来たことが何より嬉しかった。（本当に忙しかったよね。）

目の前に広がる雪に覆われた天山の山々。自然は偉大で美しすぎる。そこから始まった44日間。スノーイングファンマガジンに載っていたボーダー達のレポートの題を拝借しよう。『天山　～心の旅』 全く筆舌に尽くしがたいとはこのことか。書けば嘘っぽくなるし、喋れば軽っぽくなる。まだまだこの体験を伝える表現力は私には備わっていないようである。

そこでとりあえず、私の失敗談と不思議な体験を綴ってお茶を濁すことにする。

【失敗】

その1.「旅の恥はかき捨て」の巻

カルカラキャンプや南BCには本格的なサウナがあった（北BCは去年壊れたとかで行水しかできなかったが）。男性がいなくなったのを見計らってたまちゃん特製のLADY’Sマークを扉に張り入ることにした。しかし、おじさんが突然入ってきてびっくり。相手はパンツをはいている。そういえば女の人も水着を着ている。でもこちらはすでに温泉モードに入っていて一糸まとわぬ姿。。ここは肝を据えるしかない。サウナは混浴なのだ。今度は絶対に水着を持ってくるぞー！こちらに来られる方は個人装備の中に水着を入れることをお忘れなく。特に女性は必携です。

その2.「油断大敵ーアイゼン大敵」の巻

C1でのこと。やっと着いたとほっとしてテントの入り口に向かっていったとき、アイゼンでテントのスカートの部分を踏んでしまったこと。そこは案の定かぎ裂きになってしまった。「江崎先生ごめんなさい。安芸府中高校のみなさんごめんなさい。」

アイゼンは冬山では滑落を防止し、命を守るためのものだが、歩き方によってはアイゼンで引っかけたり躓いたりすることもあり、冷静な行動が不可欠である。この場合、安全なところへ戻ってきたのであるからまず、アイゼンを脱いでテントに近づくべきだった。

その3.「水害は忘れたころにやってくる。」の巻

これもC1でのこと。テントの中で水を作っているとき原因は忘れたけれどこともあろうにコッフェルをひっくり返してテントの中を水浸しにしてしまった。水取り作戦に辻さんの貴重なタオルを使わせていただきそのばをなんとかしのいだ。やれやれ。「辻さん、恩にきます。」

その4.「滑り止めきかぬは浪人間違いなし」の巻

C2に上がるとき、突然頼みの綱のユマールだ下にも滑り出したこと。これには焦った。ユマールは本来上には動いても下には動かないものであってその性質から登高器として使われているものだ。下にずれたんじゃどうしようもない。原因はユマールのストッパーのところに雪が付いて凍ってしまいロープに噛まなくなってしまったらしい。ユマールやロープを雪につけないことが原則だが気をつけているつもりでもいつの間にか雪が付き立ち往生することとなった。辻さん、江崎さん、中村さんに何度か助けてもらった。「ありがとうございました。」

その5.「念には念を入れてない」の巻

ハンテングリ登頂の6人をC1に迎えに行った帰り、ザックの横に通して止めていたテントポールを落としてしまったこと。ベルトで締めているので大丈夫だと思っていたが歩いている途中にするっと抜けて斜面を滑り落ちていった。なすすべもなく「あー」と見ていると、高度が下がってパワーが蘇ってきた夫が斜面を駆け下りて危機一髪で受け止めてくれた。ポールの袋のひもをザックにくくりつけておけばよかったものを。単純なミスで危うくポールをクレバスの中に落としわたしも奈落の底へ落ちるところであった。くわばらくわばら。

その6.「信じるものは救われない。」の巻。

順応行動の最後の日、C2を後にするときたくさんの装備をデポしたこと。C2に再び来ることを疑わず、アタックの時に少しでも荷物が軽くなるよう知恵を働かせたのだが……・。予備の手袋、靴下、行動食、食器、トイレ用品（もちろんテントの中でする）などなど。このときデポしたものは、アタックのメンバーが下山の際持って下りることとなり、多くの負担をかけてしまったのだ。「すみませんでした。」

我が小姑“さとけん”は、ことあるごとに言っていた。「トレーニングせん奴は登れんでえ！」「決められた時間内に登れん場合アタックできんぞ！」「山での生活は、ちょっとした工夫で快適に過ごせるし、ちょっとしたミスが命取りとなるんでえ。」「時間がかかるんじゃけえ人より先にさっさと支度せえやあ！」こんな小言を聞く度に、わたしは一言も口答えせずじっと耐えていた。（日頃は、私の方が屁理屈を言うのが得意で、口喧嘩なら8割方勝っている。しかし、ここは黙って聞き流すのが利口というもの。）ある時は鼻で笑い、ある時は心の中で出来る限りの悪態を付きながらも沈黙を守っていた。「今に見ておれこの小姑め。」

だって、BCから見るハンテングリは崇高なまでにかっこよく凛としてそびえている。そして、ハンテングリはすぐそこにあるのだもの。私は登るのだ！

されど、山は厳しかった。すべては、体験してみなきゃわからない。今まで言われ続けてきた嫌みは、嫌みではなく真実だったんだよね。それは、今だからわかるのだ。案の定、私は、ハンテングリのアタックには参加せず、BCで待つ人となった。

これらの失敗は教訓と置き換えて、前向きに生きていこう！！

不思議な体験

子どものころ本で読んだ『雪の女王』の世界を私は歩いている。左手に持ったユマールをジューッと押し上げ、右手のピッケルに重心をかけて重い足を上げていく。一歩一歩重力に逆らいながら。雪面を点々と動く私たちはまるでちっぽけな虫のようだ。こんな時、頭の中を雑念がうろうろする。……・例えば、春スキー。沢に残った雪の斜面を歩いては滑り歩いては滑り…・。あれほど退屈で苦痛な登高の繰り返しはないなあ……・。肩に担いだスキーは重たいし、着いたと思ったらあっけなく滑り降りてまた歩き始めなければならない。そんな時、いつも気分を紛らせるために、数を数えるか、気に入った歌を歌う。……・ただし、今は、同じ斜面を繰り返し歩く必要はない。広い雪稜の中、ただただ根気よく足を上げて体を高見に動かして行きさえすれば目的の場所にたどり着けるのだ。仕事が差し迫っているときはこんな時間が集中して考えをまとめるのには有効だった。……例えば、明日学校朝会で話すことを頭の中でまとめるとか、今度の参観日にする授業のネタ探しとか。それほど差し迫ったものがないときには、先日、ある件で言い返せなかったことについて腹が立って色々言い訳やら非難やら心の中で言いまくって昇華してしまうとか。……結構根気のいる暗いとも思える登山は、これだから、ストレス解消にもなるのである。

やがて、ミックス地帯や岩稜地帯に入り、よじ登る体勢になると心は空っぽとなり、今までの雑念はどこかに吹き飛んでしまう。核心部に来ると頭と心と体を一つにして全知全能を駆使し、一刻でも早く危険から逃れなくてはならない。 まさに無心の境地である。自分が何様であろうと、金持ちであろうとなかろうと、美人であろうとなかろうと、正直であろうとうそつきであろうと、性格がよかろうと悪かろうと関係ない。ありのままの自分が登るしかないのだ。本質的なところでは、誰も助けてはくれない。

今回の遠征で、順応行動の最初のころ、私は、立ち止まったとき、上は見るけれども、下は見ないようにしていた。ついていくのに必死だったのもあるけれども、きっと見たら「こわーい。」と思うから。ようやく慣れてきたころ下を見た。高度にも慣れ、恐怖感も麻痺してきたのか、周りを見る余裕

も出てきた。それからは、休むたびに悠々と周りの景色を眺めた。まず、自分が座れるだけのバケツを掘り、ピッケルをザックのひもの内側にさして自分もザックも落ちないように確保する。おもむろに谷の方を向き足場を確かめてさっき掘ったバケツにちょこんと座りこむ。「もしもここから滑り落ちたら、命はないよね。」もし、ユマールがはずれたら、カラビナもはずれたら、フィックスが切れたら、ピッケルが抜けたら、……悪い予想を立てたら命が縮むどころか、命は無いも同然。でも、人間はしぶといもので、そういうときこそ悪いことは考えないようにするものらしい（私の場合）。「よい眺めじゃ、幸せ、幸せ。」

そして、ある時（それが、休憩中だったのか、下降中だったのかよく覚えていないが）、私は思った。

「このまま、ふうっと消えて無くなりたいなあ。」「雪と氷の世界に溶け込んでしまうのもいいねえ。」「今までの人生、結構楽しかったよねえー。思い残すこともないしなあ。」天にも昇る気持ちとは、このことなのか。ランナーズハイならぬクライマーズハイ？。長距離ランナーがある程度の距離を超えると苦しさを通り越して感じるというランナーズハイ。これは、クライマーズハイなのか？その時、私は自分の中に広がる得体の知れない幸福感に素直に感動してしまった。「うーん、幸せ！」これは、自殺願望ではなく、自然と共感して一体となりたいという気持ちであり、不思議なことに、あくまでも満ち足りた幸せ感なのだ。

生きていること

ポベータ隊がアタックの日、私たちは岡谷隊に合流させてもらい、オテクリティを目指していた。その日は、快晴でオテクリティC2に着くころポベータは遠くにはっきりとその姿を見せていた。しかし、だんだん雲に隠れていった。そして、ビバーグするという交信。不安がよぎる。翌日、曇りの中、私たちはオテクリティにアタックし、無事C2に戻ってきた。その夕方、2ビバーグめに入るとのこと。不安はいっそう大きくなる。とにかく、翌日急いで南BCに帰ることとする。南BCに着くと、緊急の事態にただならぬ気配。ターニャ（ベースキャンプスタッフ）やキャプテンダニョール（ベースキャンプマネージャー）、はてはカズベック（ハンテングリ社社長）に救助を要請するが、難航している様子。とうとう3ビバーグ突入となる。私は、なすすべもなく、ただただターニャやキャプテンダニョールにお願いすることしか出来ない。とにかく、あとは、４人の生きる力を信じて、ひたすら祈るしかなかった。

夜、無線をオープンにして交信があったときに備えていた。夜中に、テントを出た。快晴。こぼれ

落ちんばかりの星が夜空に瞬いていた。ポベーダは、何事もないかのように、悠然としてその姿を現している。その時、オベリスクとパージャプジャベラの間の稜線に向かって、流れ星がひとつ、すうっと落ちていった。命がひとつ消えるような気がしてとっさに心の中で叫んだ。「お星さまになっちゃいけない！！絶対になっちゃいけないよ！！！」

長い長い夜が明けた。そして、届いた隊長の声。生きている！４人とも、生きているのだ！！！！ありがとう……！すべてのものに感謝したかった。

何日間かの間に、何十年か分の気苦労を、まとめてしたような気がする。我が子がいない私は、人のことでこんなに心配することは、今までになかった。父の死も、予期されたことだったので運命と諦め、受け入れるしかなかった。けれども、今度の場合、全く違うのだ。神様に死を宣告されてもいない人が、突然、死と向き合って、必死で生きようとしている。これは、あまりにもドラマティック
すぎて、辛すぎた。何にも力になれない分、心がズタズタになりそうだった。

そして、４人は、生還した。
「松島さん、辻さん、冨永君、松平君、お帰りなさい。まだまだ、お星さまになっちゃあいけません。」

予定通りの日程で、カザフスタンを出国し、日本に帰ってきた。９月からは、2学期が始まる。しかし、私は、天山を引きずって過ごしていた。そんなある日、自分が病気であることが発覚。これも、現実に向き合いなさいと言うことなのか。検査の結果、手術を決意。。１９９８年、天山で心のリフレッシュをし、１９９９年、手術でからだのリフレッシュをした今、私は、すこぶる元気である。

扉を閉じて。

１９９８年は、私の一生の中で、心に残る年となった。今、私の中の『天山、心の旅』は終わりを告げ、新たなことが始まろうとしている。

「激動の４４日間を、ともに過ごした天山登山隊のみなさん、ほんとうにありがとうございました。ハンテングリには登れませんでしたが、昇った記憶がとても心地よくて、これからもぼちぼち山を楽しみたいと思っています。」

（佐藤隆子　記）

南BCを去る日

１０．総括

９６年広島国体で深まった人的ネットワークを利用し、岳連合同チームで色々なレベルの海外の山を目指すプロジェクト・広島県山岳連盟国際化プロジェクトの一環としてこの登山隊は誕生した。我々の目標は7000m。しかし、それに見合うだけの高所登山の経験は大阪山の会から参加の中村氏のみであり、ほとんどのメンバーが初体験であった。素人の寄せ集め集団からのスタートであった。同時期にバフィン島の岩壁登攀（名越隊長）に向かったエキスパートグループと普通の登山者の中間に位置する中堅グループと考えていいだろう。各山岳会だけではなかなか立ち上げられない計画が実現できたのだから意義深いことである。計画はおのずと初心者向けとなった。ベースキャンプでのサポート、ルート工作、いざというときのレスキュー、現地での手続き一切をハンテングリ社が請け負ってくれる。経費はどうしても高くなり渡航費用別でアルマティ発着３０００ドル。楽ができるのだから致し方ない。考えようによっては安いといえる。計画はメンバーの力量に見合ったものであった。

トレーニングに使った大山北壁別山バットレスレベルのルートでリードできるのが松島、佐藤建、堀内の３名であり、ベテランの中村氏を加えた４名をリーダーメンバーとした。９名中６名がハンテングリ峰に登頂できたのは大成功だったと思う。フィックスがあるとはいえ、いわゆる素人でも何とかなるのは６０００mレベルまでである。６千mより上は体力、技術、経験による応用力がないと大変危険である。それも天気に恵まれた時の話であり荒れればどうしようもない。C3（５８００m）からハンテングリ峰アタックにかかった時間は16時間であった。現地は午後９時半まで明るく行動できる。ライトをつけての行動は１時間であったが大変危険でぎりぎりの帰還であった。天気が良かったことがラッキーであった。

登頂後高度障害で足のふらつきが出た佐藤が無事キャンプに帰れたのは唯一余裕のあった中村氏のサポートのおかげである。アタック翌日は

全員動く余裕なく沈殿。翌々日はC3、C2、C1の撤収と9名分のデポ品の回収でとんでもない重さになったザックがこたえて、疲労困憊のBC帰着となった。登頂できた6名は体力ぎりぎりの挑戦であり大満足である。サポートにまわった3名に感謝した。

7/14にBC入りして8/3にハンテングリ峰の登山活動が終了。予定ではここまでを2週間であったが3週間かかった。しかし我々の力量からすれば上出来であった。ハンテングリでの疲労と消耗はさすがに激しく9名中ボベーダ峰挑戦を表明したのは松島、辻、中村の3名だけとなった。残り6名は3名のサポートと後続のトレッキング隊と合流することとなった。

ボベーダ峰では東京YCCの松平・冨永と行動を共にした。結果的には合同であったことが双方にプラスとなったと評価している。我々も彼らに助けられたし彼らも我々に助けられた。しかし、このことは4名が生還できたからこそ言えることであり、もし冨永・松平をあの稜線で失っていれば、その後の混乱は簡単に予想がつく。我々は彼らを見殺しにしたことになるし、いくら我々に余裕がなかったと家族に言い訳しても遺恨を残すことは目に見えている。本当に運が良かった。ガイドがC5に複数で到達できなかったら松平は確実に殺していた。現地で複数の隊が行動を共にすることはよくあることであるが、何もなければ問題ないがいざ何かかが起これば当事者はともかく家族を納得させることは困難である。松平氏とは彼の95年ハンテングリ登頂報告書をいただき富士山でも一度行動を共にしており、今回のハンテングリ社との交渉と飛行機の手配は我々が行った。

ボベーダ峰での予備日は4日であったが丸々使ってしまい、しかもC2からヘリで収容されても日程的にぎりぎりとなった。結果論ではあるがハンテングリ峰で予定外の1週間を使った後の計画そのものに少々無理があったようだ。

さて8/14の頂上直下のビバークである。夕方5時、標高7250m頂上まで標高差約200m水平距離800mを残していた。雪稜での胸までのラッセルで力尽きビバークに入った。予定では3時までに登頂できなければC5に引き返すことになっていたがだれもC5に引き返す発想はなくビバークの決定は全員一致であった。なぜかといえば全員高度順応が順調であり8/12以降快晴が続き悪天になるかもという予感もなかった。燃料も一晩分はありなんとかなると思っていた。なりよりも頂上に目が眩んでいた。実際15日が好天であれば登頂していただろう。また14日、日没ぎりぎりまでC5に近づいていれば傷は浅かったであろう。しかし、7000mでの悪天の怖さを知らない私はリーダーとして最悪の状況を予測することを怠り7200mのビバークを選んだ。14日夜にBCとの交信でカズベクが危険だと騒いでいることも理解できなかった。理解できたのは二日後である。死線をさまよい、ほんとうにヤバイと思った。

この三日連続ビバークで分かったことであるが、極限の高度と寒さのなかで一番大切なのは装備である。靴、手袋、衣類、ツエルト、シュラフカバー、マット、等の良し悪しで生死が決まるし凍傷の度合いも変わる。二日目は燃料が尽き水を作れなかった。高所での水分摂取不足は致命的である。体液が濃くなり血液循環も悪くなり凍傷を悪化させる。雪をかじって耐えたが大変苦しかった。燃料は十分準備すべきである。最初のビバークで寒さを恐れ一晩中コンロに火をつけていた。雪を溶かすだけで節約すればよかったが、後の祭りである。食料は行動食が約1週間分あ

り問題なかったが水なしではなかなか喉を通りにくかった。無線機でBCと交信できたことが本当に心強かった。どれだけ励まされたことか。電池はリチウム、軽くて低温に強く長持ちで最適である。それから最後は精神力である。決してあきらめないことである。状況がいかに悪くても何とかなると信じ頑張ることである。

全員無事帰国することはできたが結果的に隊員の体と心に深い傷を負わせたわけである。それ故この登山は失敗だったと思う。しかし、自然の偉大さを知ることができ、また隊員一人一人にとって次に向かうステップとなったと信じている。これから謙虚に山と向きあっていきたい。

「支援してくださった皆様に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。」（松島）

11. 後援・援助・支援

後援: 中国新聞社
広島県教育委員会
広島市教育委員会

協賛: (株)キタムラ (株)サタケ
SRC広島店 (有)ドンマンノール
ﾏｳﾝﾃﾆｱﾘﾝｸﾞｷﾞｱｼｮｯﾌﾟYAHHO

白島クリニック
NHK広島支局

支援: 広島県山岳連盟の皆様

C2よりハンテングリをのぞむ

１２．あとがき

早いもので、広島県山岳連盟の登山隊として天山山脈のハンテングリ、ポベーダ峰への遠征を終え、あっという間に4カ月が過ぎようとしています。
いま考えてみますと、あの中国国境カザフスタン、そしてキルギスタンという異国の地で過ごした40日間が､夢のように思われます。

それまでお互い、顔は知っていたものの、一度も同じ山行をしたことのなかった今回のメンバーが、たった一年あまりの準備期間で、色々な試行錯誤を続けながら日々を過ごしていきまた。

今回のメンバーは自分自身も含めて、決してその道のエキスパートといわれる人はいませんでした。ただトレーニング山行を通じて全員が「何とか 7000 メートル峰の頂上に立ってみたい」という強い気持ちで、色々な試行錯誤を続けながら日々を過ごしていったと思います。

本当に不安だらけの舶出だったと思います。ベースキャンプで何ともいえない気まずい雰囲気になったこともありました。私自身、言葉の不自由で、地元のガイドや BC のスタッフとうまくコミーユケーションが出来なかった事。とっさの対処がうまくできなくて隊長や他のメンバーの方に迷惑をかけた事。そしてオブザーバーとして参加していただいた大阪府山岳連盟の中村氏に色々とお世話になった事。そんな事実をへて、ハンテングリは天候にめぐまれて「一応」成果をあげる事ができました。

しかしポベーダはその長大なルートと悪天候に翻弄され結果的には「遭難」と言わざるをえない状況になったことも事実です。自らの体に後遺症をのこした隊員もいました。そのことを考えると心が痛みます。

ただ私たちの残してきた「ひとつの日標に向かって集まった広島県山岳連盟としてのメンバー」が強烈な印象を自らの山行記録の中に残した事は意義のあるものだったと信じています。

これをひとつの参考として次の目標に向かう「岳連」としての遠征隊が組織されることを願ってやみません。　最後になりましたが今回の山行に際し、各方面からの励ましやアドバイスを頂いたことを心から感謝いたします。
「我々は少しの失敗をしたけれど、多くのものを得ました。

多くのものを次の人に伝えて、多くの人が美しいものを、その目にされることを願っています。」

1998年11月30日

1998広島県山岳連盟天山登山隊

堀　内　輝　章

南ベース（キルギス）よりハンテングリ